

516

357



* 0032976001 *

0032976-001

516-357

台灣現勢要覽

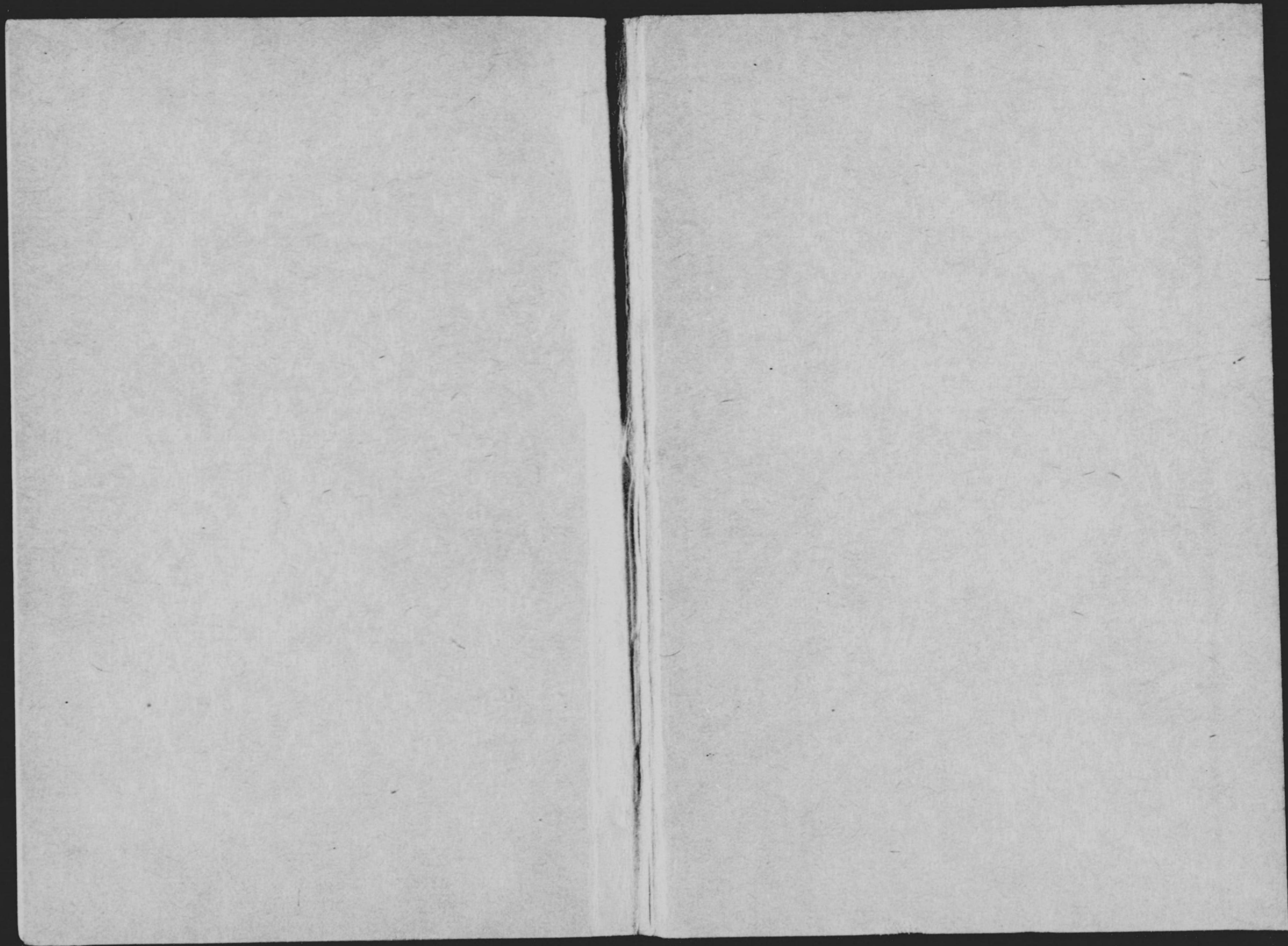
台灣總督府・編

台灣總督府

昭和11至14年版

[昭和11] - 14

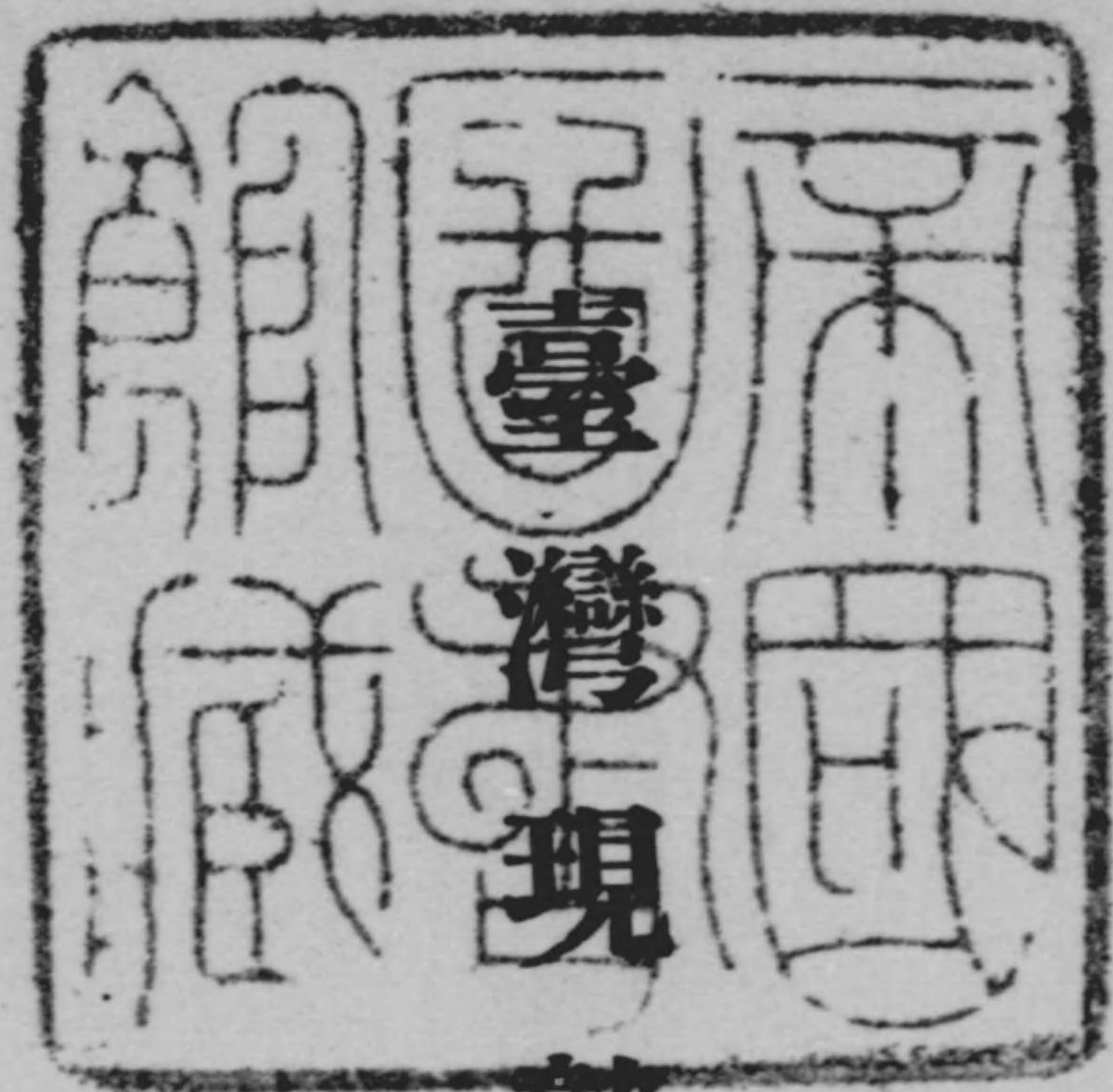
AFC



5.16
357

臺灣現勢要覽

昭和十一年版



勢要覽



發行所寄贈本

516-357

凡例

- 一 本書は本島の現勢を知るの便に資せんが爲め、主要なる事項に就き其の統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は昭和九年の事實を基礎としたるも最近の統計あるものは努めて之を採り、又昭和九年の事實不明のもの若くは特に必要ありと認めたるものは昭和九年以前の事實をも掲上せり。
- 三 本書は特にその變遷消長を窺ひ既往との比較對照の便に供せんが爲め、必要な事項に就きては沿革及累年の事實をも掲上せり。
- 四 本書は帝國に於ける本島の地位を説明するの便に供せんが爲め、其の必要な事項に就きては内地、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和十一年五月

臺灣總督府

目次概覽

統計圖表

一	臺灣の沿革	一
二	土地	五
三	氣象	七
四	人口	三
五	行政	四
六	警察官署及職員	五
七	農業	五
八	畜産	六
九	林業	六
一〇	鑛産	七
一一	水産	六
一二	工業	七
一三	糖業	七

一四	貿易	七
一五	財政	七
一六	專賣	九
一七	金融及商業	三
一八	學事	五
一九	衛生	七
二〇	水利	九
二一	鐵道	五
二二	郵便、電信及電話	七
二三	職員及俸給	六
二四	最近九箇年間の趨勢概覽	五
附錄		

目次

四	三	二	一	統計圖表
人口	氣象	土地	臺灣の沿革	I 臺灣及九州面積並人口比較
.....	II 臺灣及樺太面積並人口比較
.....	III 種族別出生及死亡率
.....	IV 臺灣の沿革
.....	I 位置
.....	II 總面積
.....	III 州廳別面積
.....	IV 有租地及無租地
.....	V 山嶽
.....	VI 河川
.....	一 氣溫
.....	二 降水量
.....	三 暴風
.....	三

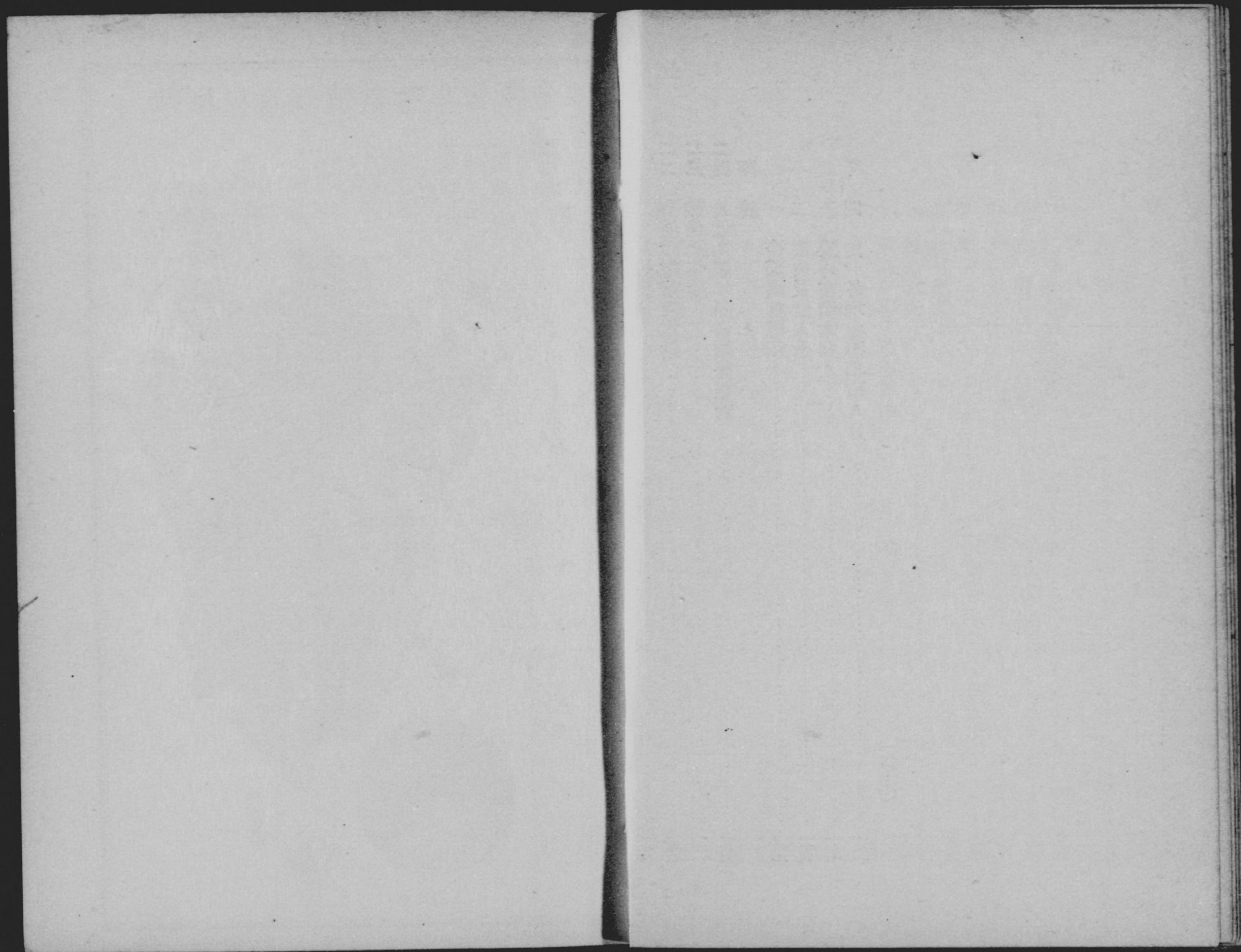
一	總人口	二四
二	州廳別人口	二七
三	主要都市人口	三一
四	蕃社戶口	三三
五	在留外國人	三五
六	國勢調查	三六
七	本籍別內地人	三九
八	人口の増加	四二
九	出生、死亡及自然増加	四三
一〇	出生率	四四
一一	死亡率	四六
五	行政	四九
一	行政區劃	五〇
二	行政區劃の沿革	五三
七六	警察官署及職員	五五
一	農業	五五
二	農業戶口	五六
三	耕地面積	五六
三	農產	五六

九八	畜產	六一
一	林業	六三
二	林野面積	六三
二	林產	六四
一〇	鑛產	六七
一一	水產	六九
一二	工業	七三
一三	糖業	七七
一四	貿易	七九
一	貿易總覽	七九
二	對手國別外國貿易	八二
三	中華民國、香港及南洋貿易	八五
四	重要品別外國貿易	八八
五	重要品別內地貿易	九〇
六	港別貿易	九四
一五	財政	九七
一	總督府財政	九七
二	地方財政	九九
三	國稅收入	一〇五

一六	專賣	一〇九
一七	金融及商業	一一三
	一 幣制	一一三
	二 銀行	一一四
	三 其の他の金融機關	一一五
	四 物價	一一六
	五 會社	一一八
一八	學事	一二五
	一 教育概覽	一二五
	二 社會教育	一二三
	三 國語を解する本島人	一二四
一九	衛生	一三七
	一 醫療機關	一三七
	二 水道	一三九
	三 地方病及傳染病	一四〇
	四 阿片	一四〇
二〇	水利	一四九
	一 鐵道	一五一
	二 官設鐵道	一五一

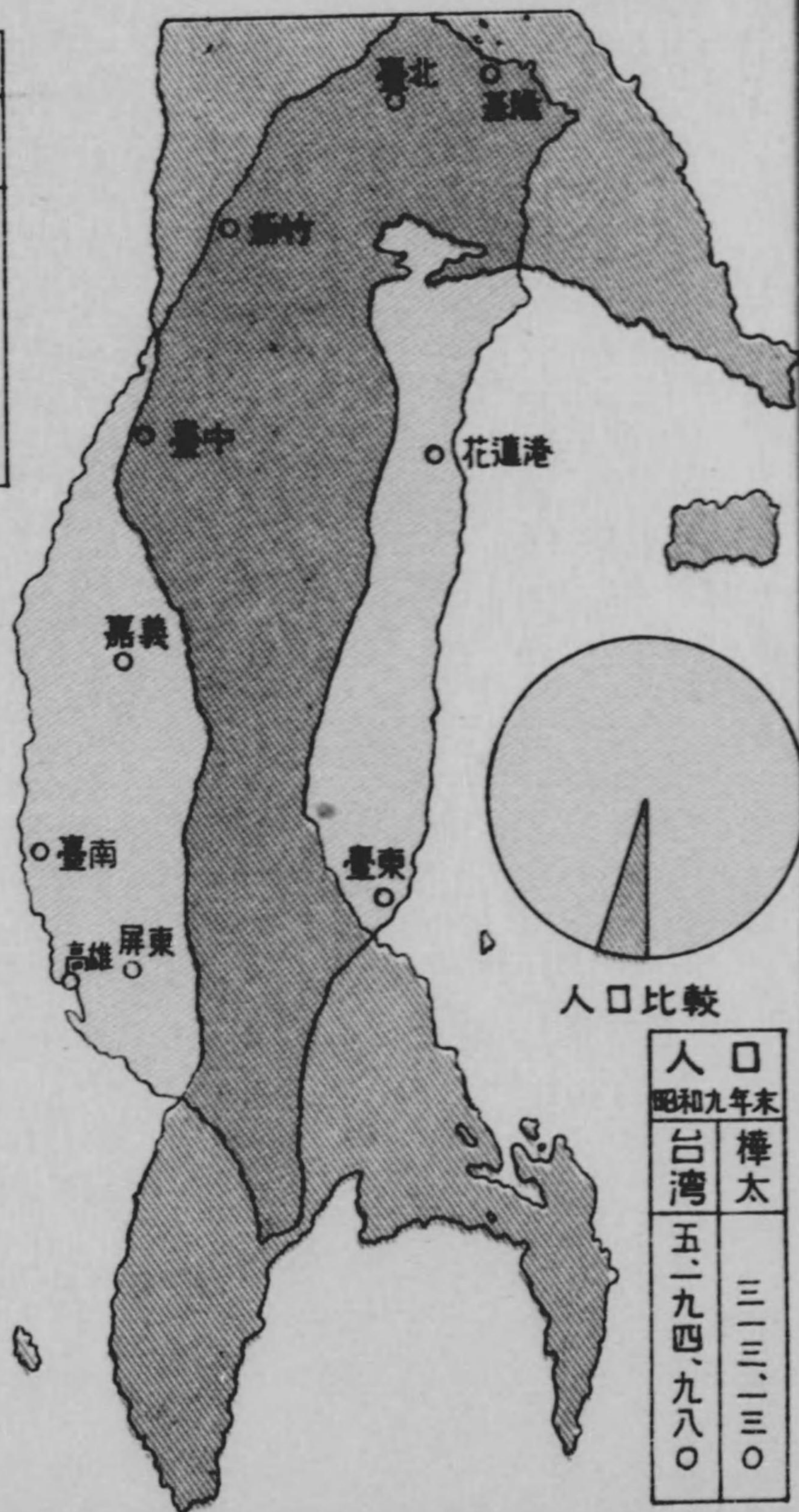
二二	二 私設鐵道	一五三
二三	郵便、電信及電話	一五七
二四	職員及俸給	一六一
附錄	最近九箇年間の趨勢概覽	一六五
	一 帝國國富總額	一六九
	二 國債及借入金	一七五
	三 海外在留本邦人	一七七
	四 内、外地主要都市人口	一八一

(以上)



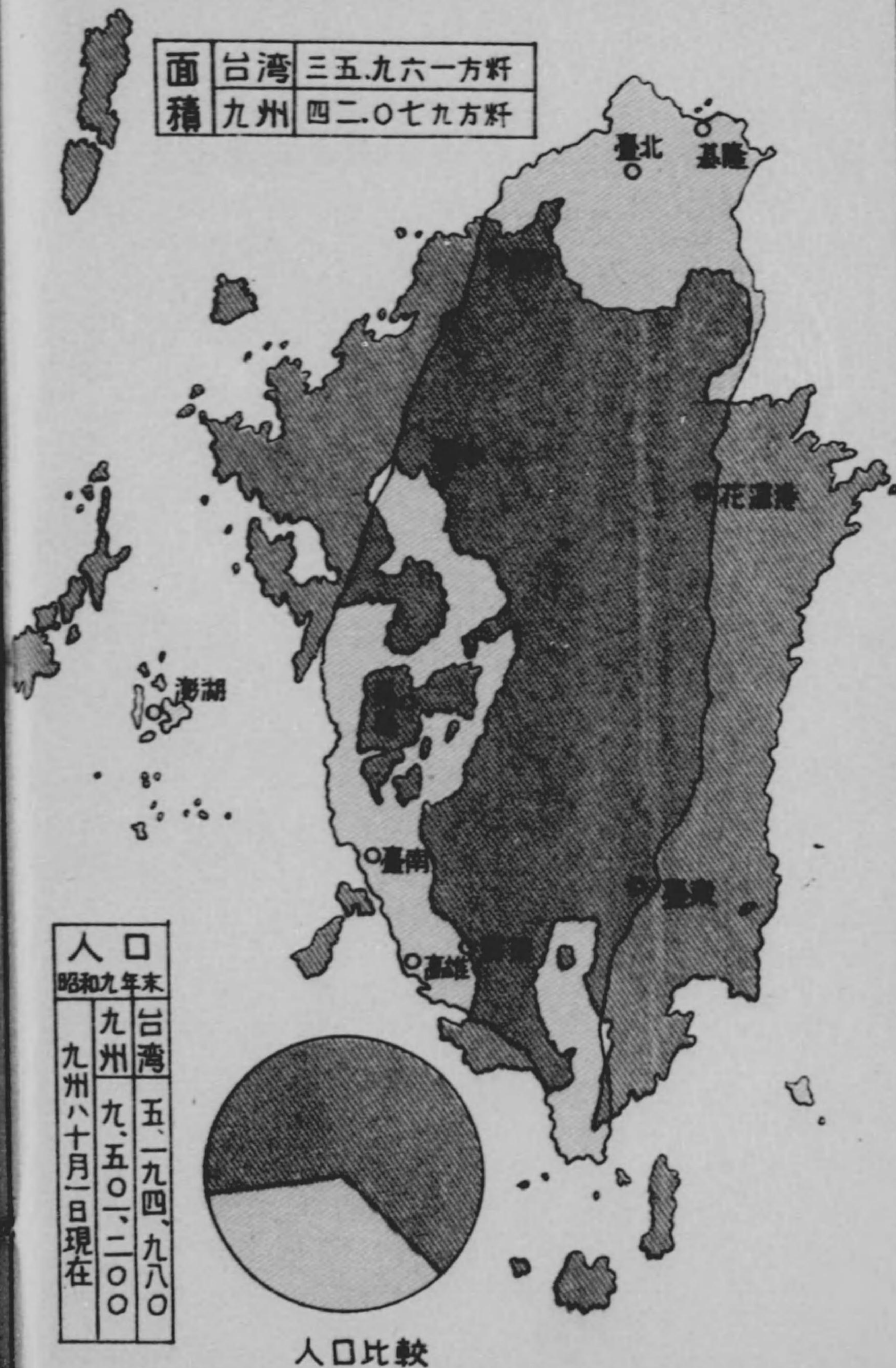
II 臺灣及樺太面積並人口比較

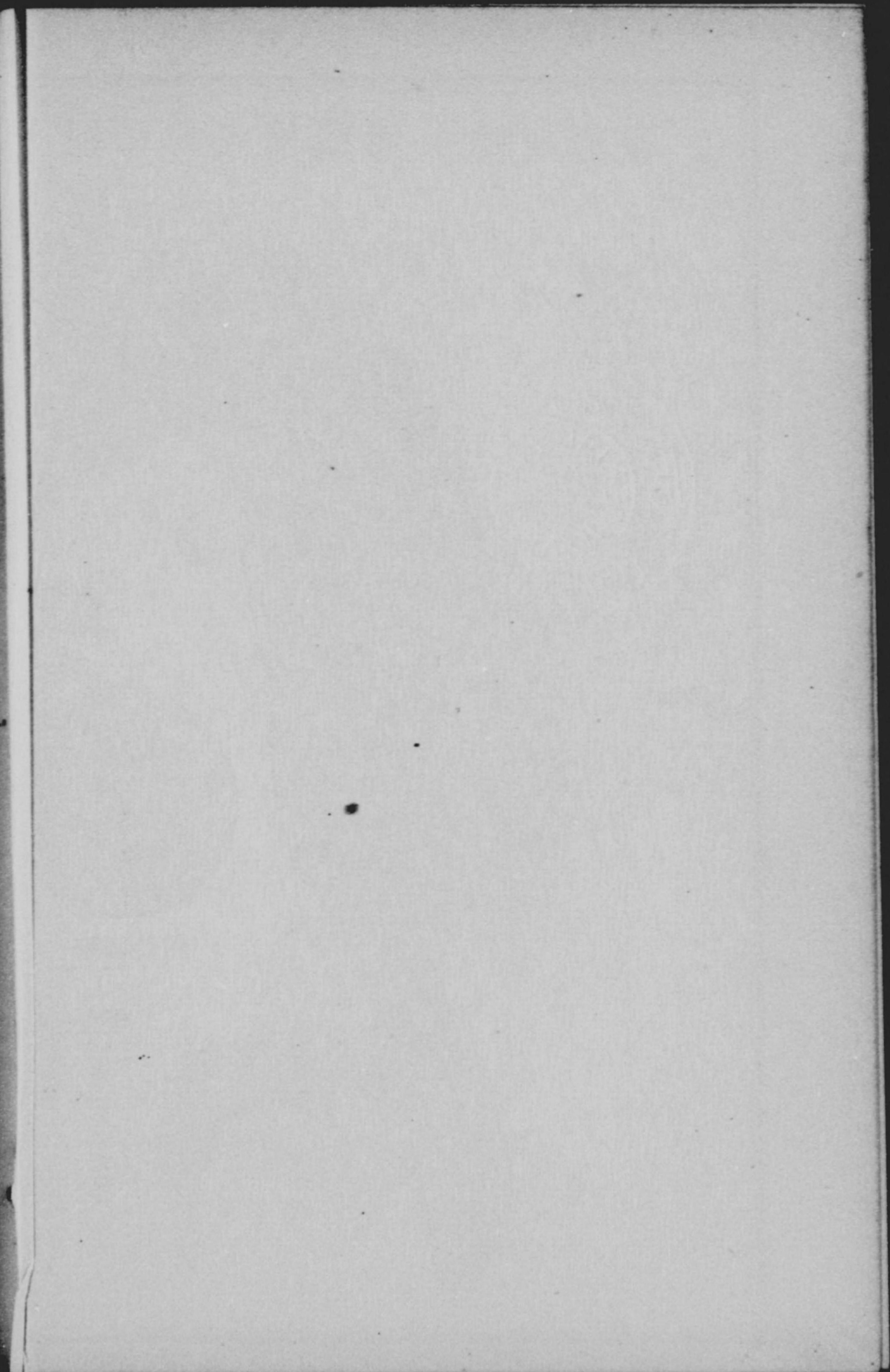
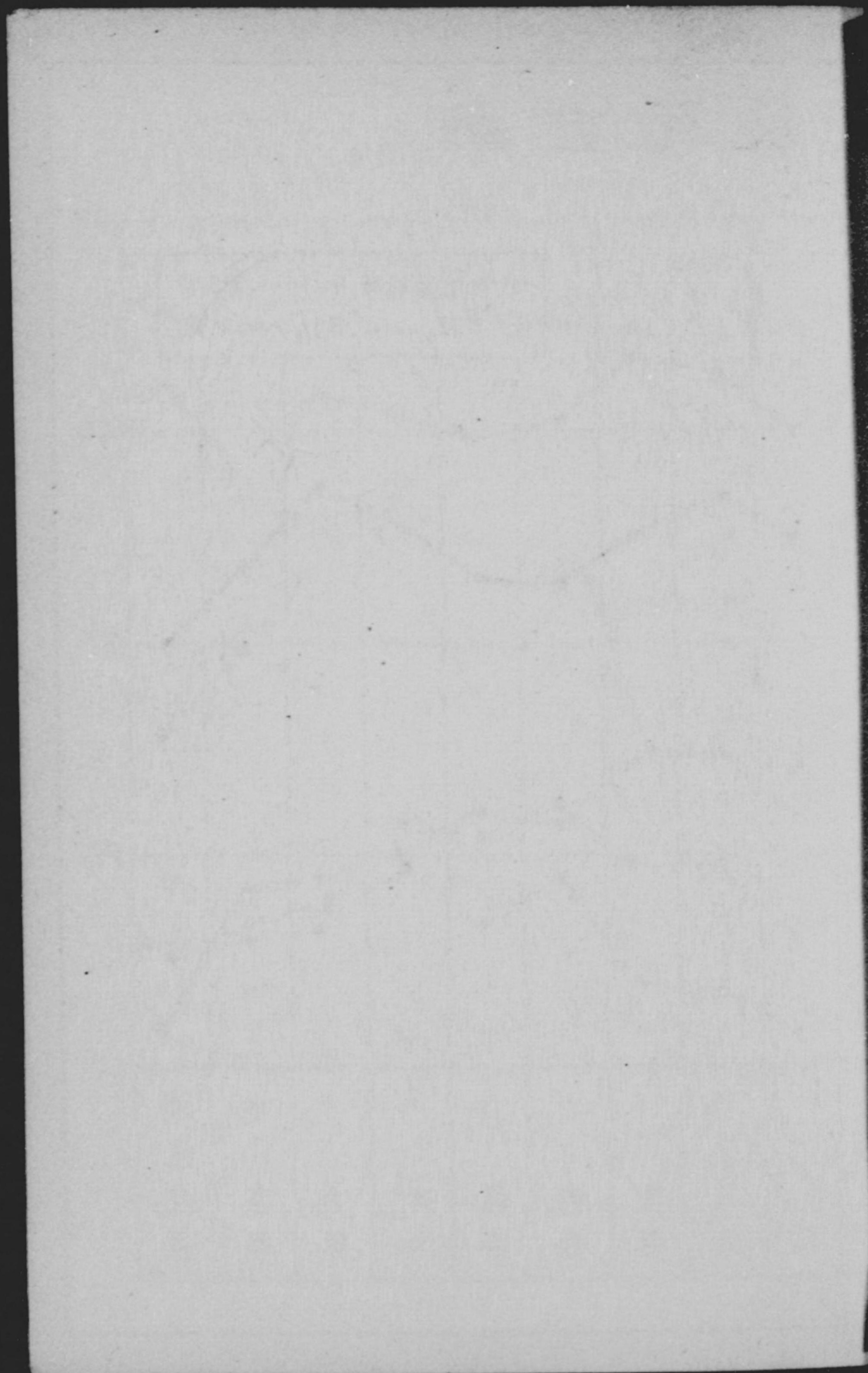
面積	
台灣	樺太
三五、九六一方料	三六、〇九〇方料



I 臺灣及九州面積並人口比較

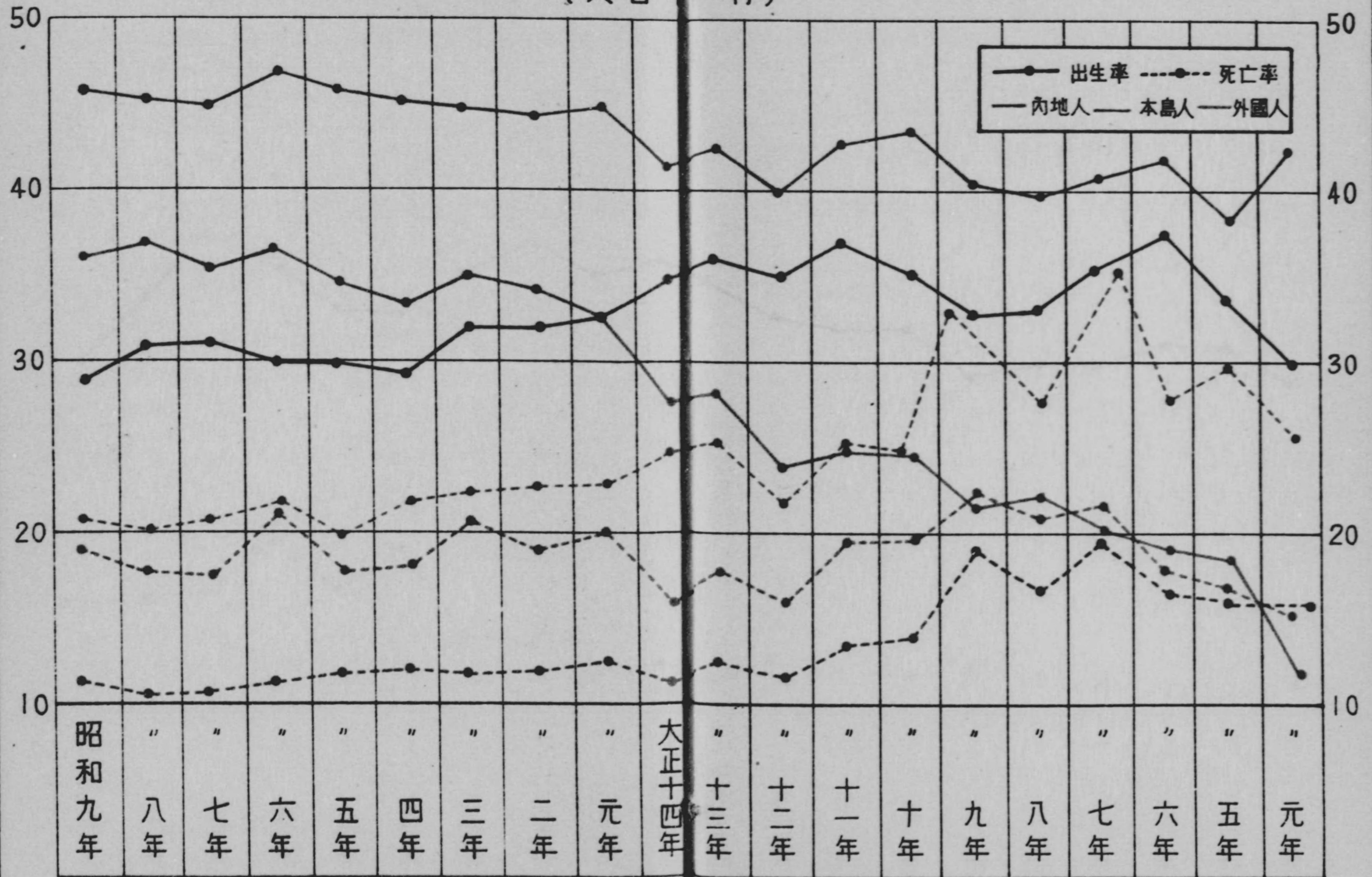
面積	
台灣	九州
三五、九六一方料	四二、〇七九方料





III 種族別出生及死亡率

(人口千=付)



一 臺灣の沿革

臺灣及澎湖島は地理的關係より往古支那人の發見に係り中古隋、唐の時代には既に支那の澎湖島に移住する者も相當にあつた様であるが臺灣本島との關係は模糊として全く不明である。

其の後元の朱葉に至り巡檢司を澎湖島に置き是を福建省同安縣に隸屬せしめた事がある。西紀一、六〇二年蘭人、爪哇のバタビヤに東印度會社を創立し東洋貿易に従事するや後十九年東進して澎湖島を占領した。澎湖島は支那安危の鎖鑰なれば明政府は是が恢復を企圖せしむるに當時世界の海上權を掌握せる蘭人の勢に抗すべからざるを知り西紀一、六二四年遂に許すに臺灣の占領を以てし其の代償として澎湖島を放棄すべき事を約するに至つた。

同年八月蘭人は直ちに南部臺灣に航し臺南に上陸、同一、六三〇年安平に砲臺を築造し、同十、六五〇年更にプロビデンス城を臺南に築き以て政務の廳となした。茲に於て臺灣は一私立會社和蘭東印度會社の管下に置かるゝに至つたが、蘭人の占領せるは僅かに臺灣南部のみであつた。當時和蘭と共に海外發展を競ふ西班牙は比律賓群島を占領せし後西紀一、六二六年臺灣をも領有せんと欲し、艦隊を派遣せるに南部臺灣は既に蘭人の占むる所なる故豫定の航路を變じ北部臺灣即ち基隆地方を發見して此處に上陸し砲臺を設け四圍の部落を撫化して其の勢北部臺灣を風靡した。斯かる狀勢の趨く所遂に兩國人の衝突争闘となり其の結果西班牙敗北して臺灣より一掃さるゝに至つた。

降つて明朝滅亡の際明の遺臣鄭成功は臺灣に據りて明朝を恢復せんとし西紀一、六六一

年先づ澎湖島を略し更に臺灣本島に渡り攻め蘭人衆寡敵せず臺灣を占領する事三十九年にして遂に臺灣を棄て、爪哇に去つた。鄭氏臺灣に據るや自ら王と稱し恩威並び行はれしが其の孫克塽に至つて父祖の大業を紹ぐに耐へず清國の大軍來攻するに遇ひ遂に其の軍門に降つた。鄭氏臺灣に割據し明の正朔を奉ずる事凡そ二十三年秋に康熙二十二年、西紀一、六八三年七月である。清朝は此處に於て臺灣府を設け府の下に臺灣、諸羅、鳳山の三縣を置き、臺灣府を以て福建省に隸屬せしめ福建巡撫をして是を兼轄せしめた。然し乍ら清朝の統治たるや臺灣の開發啓導に非ずして寧ろ荒廢の孤島をして帝だ放棄せざることに努めたるが如く、政府は本島を輕視し、官吏は上下共に苟安を事としたので政治紊れ土匪の内亂相次いで起り所謂「五年大反三年小反」、光緒十四年に至る迄内亂を生ずる事、實に二十二年の多きに達し清國政府の最も困憊せしめられた所である。

歐洲諸國東漸の勢を示し臺灣も亦漸く列國の注目する所となり清國は臺灣に於ても咸豐九年安平、淡水、同治初年更に基隆、打狗の各港を開き英佛諸國と通商するに至り孤島臺灣は一躍して萬國交通の公路となつた。明治四年琉球藩民五十餘名臺灣に漂著し南部牡丹社蕃人に殺害せられたが清國政府は生蕃は化外の民なり固より政治の及ぶ所に非ずとして責任を回避したので、我が國は清國の主權臺灣に及ばざるものと認め同七年四月海軍中將西郷從道を遣はして是を討伐せしめた。茲に於て清國俄かに説を變じて臺灣は福建省に屬する事を主張し其の責を負ふて五十萬圓を賠償するに至つた。

爾來清國は時勢に鑑み臺灣統治に意を注ぐに至り光緒十一年(明治十八年)臺灣を福建省より割きて新に是を一省と爲し省下に臺南、臺灣、臺北の三府を設け臺東を直隸州として

府の下に十縣四廳を置き臺灣巡撫を任命し統治の刷新を圖る事となつた。

明治二十七年日清の修交破れ同二十八年四月十七日馬關條約に依り、臺灣及澎湖島は共に我が領有に歸した。同年五月臺灣總督府假條例發布せられ第一代總督として海軍大將樺山資紀任命せられしが當時臺灣守備の清國兵等は割讓を潔しとせず我が國に對し抵抗せんとしたので帝國は茲に斷乎として征討の命を發するに至つた。近衛師團長北白川宮能久親王殿下は大命を拜して征途に就き給ひ、躬ら軍に將とし三貂角に御上陸幾多の峻路を超えて六月三日基隆を陥れ翌日臺北に入り臺灣北部の鎮定を完了せられた。他方南部に於ける劉永福の徒も陸軍中將高島鞞之助の討つ所となり六箇月にして臺灣全島全く鎮定したのである。

其の後土匪の變亂相次いで起り出沒隱現極まりなく、北を討てば南に起り、南を懲らせば北に現れ總督府は是が爲に奔命に勞れんとし乃木、桂兩總督に亞いで兒玉總督代るに及び銳意匪賊の剿討に従事し三十五年五月遂に臺灣有史以來の土匪は全く滅盡せられ臺灣數百萬の生靈此處に初めて其の堵に安ずる事を得我が皇威に服するに至つた。

香港 刺港
 麻尼 防刺
 海貢 防刺
 西貢 防刺
 盤谷 防刺
 新嘉坡
 巴達維亞

(香港經由)

四七九
 七七四
 九六一
 一三〇〇
 一九〇〇
 一八三四
 二二三〇

二 總面積

本島の面積は三萬五千九百六十一方秆にして、帝國の總面積六十八萬一千三百方秆中その五分三厘を占め、九州よりは稍々小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すればその六分の一に當る。尙之を列國の面積に比較すれば、瑞西(四萬一千二百九十五方秆)とサルヴアドル(三萬四千二百二十六方秆)との中間に位す。

總數	六八,一七一	方秆	一〇〇%
臺	三三,九六一		五三
朝鮮	三〇,七六八		三三・四
樺太	三六,〇八九		五三
關東州及鐵道附屬地	三,七五七		〇・五

南洋群島

二,一四八
 三二,五四五

〇・三
 五二

本表は拓務統計に依る。

三 州廳別面積

五州三廳中、面積の最大なるは臺中州の七千三百八十三方秆にして、高雄、臺南、花蓮港、臺北、新竹、臺東の順序を以て之に亞ぎ、最小なるは澎湖廳にして僅かに百二十七方秆なり。

今之を内地府縣と比較するに臺中州は熊本、宮城、高雄州は三重、愛媛、臺南州は愛媛、愛知、花蓮港廳は和歌山、京都、臺北州及新竹州は京都、山梨、臺東廳は奈良、鳥取の各中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

(イ) 州及廳の面積

總數	三五,九六一	方秆	一〇〇%
臺	四,五九四		一二・八
新竹	四,五七〇		一二・七
臺中	七,三八二		二〇・五

臺南州 五,四三二・四六
 高雄州 五,七二八・七
 臺東廳 三,五二五・三五
 花蓮廳 四,六二八・七
 澎湖廳 一,六八六

一五・一
 一五・九
 九・八
 二・九
 〇・三

内地府縣との比較

熊本市 七,四三七・七五
 宮崎縣 七,三八二・九四
 三重縣 七,二七三・七五
 高松縣 五,七六五・二六
 愛媛縣 五,七二一・八七
 愛知縣 五,六六七・二六
 和歌山縣 五,〇八一・二四
 花巻市 四,七三三・四八
 京都府 四,六二八・七
 府廳縣 四,六二二・二〇

方軒
 七,四三七・七五
 七,三八二・九四
 七,二七三・七五
 五,七六五・二六
 五,七二一・八七
 五,六六七・二六
 五,〇八一・二四
 四,七三三・四八
 四,六二八・七
 四,六二二・二〇

臺北州 四,五九四・三四
 新竹縣 四,五七〇・〇一
 山梨縣 四,四六五・八七
 奈良縣 三,六八八・六〇
 臺東廳 三,五二五・三五
 鳥取縣 三,四八九・四八

四 有租地及無租地

本島に於ける土地制度の完成は明治三十六年にして以來諸種の産業的施設及經營の刷新に伴ひ逐年土地臺帳登録地を増加し現在に至れり。
 昭和十年一月一日現在に於ける有租地は八十六萬二千甲、無租地は四十二萬二千甲にして、前者の内譯は田四十五萬二千甲(五割三分)、畑三十五萬四千甲(四割一分)、養魚池及建物敷地五萬五千甲(六分)、後者の内譯は國有十一萬一千甲(二割六分)、民有三十一萬一千甲(七割四分)なり。
 今昭和十年一月一日現在を大正十五年一月一日現在に比較すれば有租地は六分、無租地は一分を各増加せり。

(イ) 有租地及無租地

有租地	無租地		總數	面積(甲)	%
	田畑	養魚池			
八六一、五八二	三三三、九二八	一八、〇六一	四三三、一八五	一〇〇.〇	100.0
四五二、四七一	三七、三二一	一、一〇三	四三三、一八五	一〇〇.〇	100.0
三二一、一五二	一、一〇三	三二一、一五二	三二一、一五二	七三.七	73.7

(口) 累年比較 (各年一月一日現在)

年	有租地(甲)	指數	無租地(甲)	指數
大正一	八二二、五九五	100	四一九、九八九	100
昭和	八三三、九〇五	101	四二六、六九八	九
同	八三三、〇八七	101	四三二、九五〇	101
同	八三七、三三四	101	四三三、二〇一	101
同	八三七、四八七	101	四二八、七四七	101
同	八二九、五九五	101	四二七、七六一	101

同	同	同	同
八三八、四〇四	八四二、五三九	八五三、四四一	八六一、五八二
103	104	105	106
四三五、八三六	四二九、三六一	四二八、三三四	四三三、一八五
104	103	103	102

五山嶽

本島は帝國第一の高山、新高山を始め、海拔一萬尺以上四十八座、九千尺級十七座、八千尺級二十四座、七千尺級二十六座を有す。即ち七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等垂直的分布の林相を有す。

帝國の全領土を通じて一萬尺以上の高山は總數六十一座を算し、就中本島は四十八座を占め、内地は僅かに十三座を有し、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北岳は實に四十一位の下位を占むるに過ぎず。

新高山	次高山	秀姑巒山	マボラス山
三、九五〇	三、九三一	三、八三三	三、八〇六
順一位	二	三	四
南湖大山	富士山(内地)	中央尖山	關山
三、七九七	三、七七六	三、七二五	三、六六七
順五位	六	七	八

大水窟山	三、六四五	九	能高山南峰	三、三三三	六
葦萊主山北峰	三、六〇五	〇	卑南主山	三、三〇五	元
東郡大山	三、六〇〇	一	干卓萬山	三、三〇四	元
大郡雪	三、五七三	二	カシパナン山	三、二九四	三
雲覇尖	三、五六九	三	郡大	三、二九二	三
葦萊主	三、五四四	四	タロコ大山	三、二九二	三
東嶺大	三、四六五	五	卓社大	三、二七八	三
合歡	三、三九四	六	小關	三、二五五	三
北合歡	三、三九四	七	能高山	三、二五三	三
東合歡	三、三九四	八	屏風	三、二三四	七
南玉	三、三九一	九	大武	三、二三三	六
桃	三、三九〇	〇	尖	三、二三三	六
シソカン	三、三八一	一	バトツノ山	三、二二一	〇
畢祿	三、三七九	二	北岳(内地)	三、一九二	四
丹大	三、三七一	三	間ノ嶽(同)	三、一八九	四
白姑大山	三、三四九	四	鎗ヶ岳(同)	三、一八〇	四
葦萊主山南峰	三、三三五	五	ハイノトナ山	三、一七五	四
南雙頭山	三、三三三	六	マビーサン山	三、一六七	四
			白石山	三、一三八	六

六 河 川

ウワノシン山	三、二二三	〇	御嶽山(内地)	三、〇六三	五
赤石山(内地)	三、二二〇	〇	關門山	三、〇五二	五
穗高岳(同)	三、一〇三	〇	大石公山	三、〇四八	五
東俣山(同)	三、〇九五	〇	鹽見嶽(内地)	三、〇四七	五
白根山(同)	三、〇九三	〇	小雪山	三、〇四三	六
安東郡山	三、〇八九	〇	仙丈岳(内地)	三、〇三三	六
荒川嶽(内地)	三、〇八三	〇	北穗高岳(同)	三、〇三三	六
巒大山	三、〇六六	〇			

内地の分は第五十二回國勢一斑に依る。

本島の地勢南北に長き關係上幅員狭く其の最も廣き部分と雖も僅かに百六十軒内外に過ぎず。且つ稍々東寄りに本島の脊梁を爲す中央山脈の高峰南北に縦走するを以て、河川の發源何れも近く、上流は勿論往々中流と雖も兩岸懸崖絶壁にして屈曲甚しく水流急激にして舟楫の便多く望むべからず。而も下流に至るや河幅徒らに大をなし、支流多く灌漑に利便あるも一度豪雨に遭はんか、忽ちにして洪水氾濫の禍を被ること尠しとせず。

次に本島に於ける河川の主なるものは濁水溪の百七十軒を最とし下淡水溪の百五十九軒之に亞ぎ、以下六十軒以上のもの僅かに十六を算するに過ぎず。

濁水溪	下淡水溪	淡文河	曾文溪	大甲溪	烏甲溪	大安溪	北港溪	卑南溪	秀姑巒溪	八掌溪	朴子溪	宜蘭濁水溪	急水溪	二層行溪	頭前溪
(臺中州臺南州)	(高雄州)	(臺北州新竹州)	(臺南州)	(臺中州)	(同)	(新竹州臺中州)	(臺南州)	(臺東廳)	(花蓮港廳)	(臺南州)	(同)	(臺北州)	(臺南州)	(臺南州高雄州)	(新竹州)
一七〇・二	一五六・六	一四四・二	一三六・九	二四〇・〇	二二六・六	八七・三	八二・五	八一・七	七六・七	七四・三	七二・〇	六八・一	六四・一	六三・三	六〇・九
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六

本表は内務局土木課調査、臺灣主要河川概要一覽表に依り六十粒以下は之を省略せり。

三 氣 象

一 氣 溫

北回歸線は本島南部嘉義市の郊外を通過し、以南は熱帶圏に屬するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣溫は取て内地より高度と謂ふにあらず。而も冬季は頗る溫暖にして、高山を除き平地にては領臺以來未だ曾て降雪を見ず。北部の平地に於ては偶々霜を見る事あるも極めて稀にして、結氷は改隸後僅かに二回に過ぎず。南下するに隨ひ氣溫は益々高く極南の恒春地方は冬季と雖も溫暖なる好氣候にして恒春の稱ある所以なり。

今昭和九年に於ける平均氣溫を内地其の他と比較するに最低(沖繩の那覇を除き)及び累年平均氣溫は道に我が臺灣最も高きも、最高氣溫に至りては内地其の他の地方と少しも異ならず。即ち臺灣の最高氣溫に就て觀るに最も高き臺東の三十七度三分は東京大阪兩市より僅かに一度或は二度高く、最も低き恒春及澎湖の三十三度一分は内地其の他に却つて高き地方多し。

昭和九年(攝氏)

平均

最高

最低

累年平均 (攝氏)

臺灣 恒春

二四・二度

三三・一度

二二・六度

二四・四度

全年	三月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖	澎湖
臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣	臺灣
高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高	高
恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒	恒
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖	湖
昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平
均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均
花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺
臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺
基	基	基	基	基	基	基	基	基	基	基	基	基	基
蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮	蓮
港	港	港	港	港	港	港	港	港	港	港	港	港	港
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北
隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆	隆
昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平
均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均

四 人 口

一 總 人 口

本島の總人口は明治三十八年末に於て、三百十二萬人なりしが、大正元年末には三百四十三萬人に、同十年末には三百八十三萬人に、昭和元年末には四百二十四萬人に何れも増加せり。

今昭和九年末現在に就きて觀るに總人口五百十九萬五千人にして内、内地人二十六萬三千人、本島人四百八十八萬二千人(平埔族五七、五五七人、高砂族一四八、四七二人を含む)、外國人四萬八千人なり。

昭和九年末現在帝國の總人口は九千六百四十萬人を算し、本島は五百二十萬人にして實に其の五分強を占む。

(イ) 種 族 別 人 口 (昭和九年末現在)

總 數	男	女	%
三、一四六、九八〇	一、六五八、〇九八	一、四八八、八八二	一〇〇.〇
二、三二二、九六四	一、三三八、八二六	一、二四四、一四八	五.一
四、八八二、二八八	二、四八四、七七二	二、三九七、五二七	九四.〇

朝鮮人
外國人

一、三三六
四八、四三三

四七〇
三三、〇四一

八四六
二六、三七一

〇〇
〇九

(ロ) 内地其の他との比較 (昭和九年末現在)

總數	實數	%	密度(一方料ニ付)
臺灣	九六、四七、〇八八	一〇〇.〇	一四一.五
朝鮮	五、一九四、九八〇	五.四	一四四.五
樺太	二一、二五、八二七	二二.九	九五.七
關東州及鐵道附屬地	三三三、一三〇	〇.三	八.七
南洋群島	一、四九七、六〇〇	一.六	三九八.六
内地	九〇、六五一	〇.一	四三.二
南洋群島	六八、一九四、九〇〇	七〇.七	一七八.三

内地及南洋群島は昭和九年十月一日現在にして内地は帝國統計年鑑(推計人口)其の他は拓務統計に依る。

二 州廳別人口

五州三廳中人口の最も多きは臺南州の百三十一萬人にして、臺中州は百十六萬人を以て

總數
臺北州
新竹州
臺中州
臺南州
高雄州
臺東廳
花蓮港廳
澎湖廳

總數	實數	%	密度(一方料ニ付)
臺北州	五、一九四、九八〇	一〇〇.〇	一四四.五
新竹州	一、〇三三、一一〇	一九.九	二三四.七
臺中州	七三三、〇〇四	一四.一	一六〇.四
臺南州	一、一五七、四三三	三三.三	一五六.八
臺南州	一、三三三、八八三	二五.三	二四三.三
高雄州	七二八、四九一	一三.八	二五.六
臺東廳	六六、六二四	一.三	一九.〇
花蓮港廳	一〇六、五七二	二.〇	二三.〇
澎湖廳	六六、八四三	一.三	五六.九

(イ) 州廳別人口 (昭和九年末現在)

之に亞ぎ、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、澎湖、臺東の順位を以てす。人口密度を觀るに一方料に付澎湖廳の五百二十七人を最高とし臺東廳の十九人を最低とす。次に本島常住人口を内地(昭和九年十月一日現在)に比較すれば、臺南州は岡山、長崎、臺中州は山口、山形、臺北州は岩手、秋田、新竹州及高雄州は徳島、滋賀の各中間に位し、花蓮港、臺東及澎湖の三廳は人口寡少にして比較すべき府縣なし。

(口) 内地府縣との比較 (昭和九年)

府縣	人口	密度(一平方町二付)
岡山縣	1,310,100	187.3
長崎縣	1,313,883	242.3
山口縣	1,288,500	326.2
山口縣	1,268,300	193.2
山形縣	1,270,433	156.8
岩手縣	1,212,900	120.3
德島縣	1,035,200	67.9
秋田縣	1,017,100	234.7
徳島縣	1,028,500	88.2
新潟縣	777,800	178.1
高松縣	733,000	160.4
滋賀縣	718,491	235.6
花巻縣	714,800	176.5
澎湖廳	106,773	33.0
澎湖廳	66,843	56.9

臺東廳 六六、六四 一九〇

内地は帝國統計年鑑に依る。

三 主要都市人口

本島には昭和九年末に於て九市、三十八街あり。内、人口二萬以上の市及街は三十五にして、その第一位を占むるは臺北市の二十八萬三千、之に亞ぐは臺南市の十一萬、基隆市の八萬五千、高雄市の八萬二千、嘉義市の七萬、臺中市の六萬八千、新竹市の五萬四千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東、花蓮港の兩街は僅かに一萬餘を有するに過ぎず。

次に昭和十年十月一日現在の國勢調査に依り島内主要都市及廳所在地の三街を内地都市と比較するに、我が臺北市は、大阪、東京、名古屋、京都、神戸、横濱、廣島、福岡の八市に亞ぎ實に第九位を占め、吳市の上に位し、臺南市は門司、小倉、基隆市は宇都宮、高松、高雄市は高松、富山、臺中市は天津、山形、新竹市は宇和島、米澤各市の各々中間に位し、而して臺東、花蓮港の二街は共にその人口沖繩縣の首里市よりも少し。

(イ) 主要都市の人口 (昭和九年末現在)

總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	二八三、〇八五	八二、五四〇	一八五、五九四	一

宜蘭街(臺北州)	中壢街(新竹州)	南投街(臺南州)	大溪街(新竹州)	麻豆街(臺南州)	埔里街(同)	豐原街(同)	清水街(同)	員林街(臺南州)	斗六街(臺南州)	鹿港街(臺南州)	屏東市(高雄州)	彰化市(臺南州)	新竹市(新竹州)	臺中市(臺南州)	嘉義市(臺南州)	高雄市(高雄州)	基隆市(臺北州)	臺南市(臺南州)
二六、七六〇	二七、二八六	二八、二〇六	二九、五九	二九、九四四	三〇、一四七	三〇、一四七	三〇、一四七	三〇、三九九	三〇、八一〇	四〇、四四三	四一、七二五	五一、一五二	五二、一〇〇	六八、四一四	七〇、〇八三	八一、五八二	八四、六五〇	一〇九、八八七
二、五二九	四六、九	八六、九	三八、四	八七、四	一〇、三九	九九、一	五〇、三	一〇、一八	一一、一一	三六、九	五、五二〇	二、六二四	六、〇二二	一五、二九五	九、三三四	一九、六七五	二〇、八九六	一五、八五七
三三、八四七	二六、六九四	二七、一三九	二八、九五九	二八、九五九	二八、八九七	三〇、八七七	三二、五二二	三二、〇三〇	三四、三三二	三九、八八八	三五、〇〇四	四七、八五六	四七、五五七	五一、五六六	五九、〇三五	五九、九〇八	五九、八五九	九〇、六二七
三八、四	一二、三	九、八	四、三	二、一	二、一	二、二	一〇、三	三五、一	二六、七	一、八六	一、一九一	六、八二	五、三一	一、五五三	一、七二四	一、九九九	三、八九五	三、四〇三
〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二

北港街(臺南州)	西螺街(同)	桃園街(新竹州)	大甲街(臺南州)	淡水街(臺北州)	士林街(同)	佳里街(臺南州)	虎尾街(同)	馬公街(澎湖廳)	朴子街(臺南州)	東勢街(臺南州)	鹽水街(臺南州)	旗山街(高雄州)	苗栗街(新竹州)	板橋街(臺北州)	花蓮港街(花蓮港廳)	臺東街(臺東廳)
二六、四二四	二五、九三一	二五、七七七	二五、七五四	二五、六六六	二五、四八七	二五、〇七四	二四、二〇一	二三、四五一	二三、五七六	二三、二四	二三、五八〇	二二、二七八	二二、〇九七	二〇、四〇三	一六、一〇九	一一、九二二
一、一六五	一八、八	八〇、七	二九、六	七八、一	三五、五	五五、八	二、二〇二	二、四五四	四、五八	五、一三	五、三〇	一、二二〇	一、一〇二	五、二〇	六、三九〇	二、五八一
二五、〇〇七	二五、五七五	二四、七九八	二五、二九四	二四、五六五	二五、〇六三	二四、四五七	二二、七九九	二〇、九三二	二二、〇二九	二二、五七二	二〇、九五六	一九、八一四	一九、七三七	一九、八四三	八、八八七	九、七七九
二四、二	一六、八	一五、三	三三、〇	一六、四	一六、四	二〇、〇	二〇、〇	六、五	八、九	三、九	九、四	二、八	四、〇	八、三	五、三	七、七
二	三	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六	七

本表内地人には朝鮮人を、本島人には高砂族を各々含み、市及人口二萬以上の街のみを挙げ、且つ例外として廳所在地たる臺東、花蓮港の兩街を掲ぐ。

福臺吳門臺小宇基高高富松嘉尼大

都

岡北 司南倉宮隆松雄山本義崎津

(口)

内地都市との比較

(昭和十年十月一日現在)

世帯

人口

福臺	五五、一八四	二九一、二五七
吳門	五五、五二六	二七四、二七〇
門臺	四六、七〇七	二三一、三三四
小宇	二六、四一五	一一一、六〇九
宇基	三三、二六七	一一〇、八二六
高高	三三、七九八	一一〇、三七一
富松	一七、三五五	八七、一二七
嘉尼	一八、三〇二	八六、八八七
大尼	一八、八〇三	八六、八三五
	一七、六六一	八五、四六七
	一七、二六二	八三、三三五
	一四、八五一	七三、三四一
	一四、八三三	七三、〇七二
	一四、七八三	七二、〇六八
	一四、二三五	七一、〇六五

臺山宇新彰米直屏明丸馬首花臺

和

蓮

中形島竹化澤方東石龜公里港東

内地は帝國統計年鑑に依る。

四 蕃社戸口

臺山	一三、八五三	七〇、〇六九
宇新	一三、六三五	六九、九三四
彰米	一一、二二七	五一、二八〇
直屏	九、七五九	五一、〇三五
明丸	九、三四八	五〇、四四七
馬首	八、八七八	四三、九四八
花臺	八、五二八	四三、四三〇
	八、五九六	四二、六三七
	九、四〇六	二九、六一一
	六、三〇八	二五、〇四二
	三、九五	一九、三〇六
	四、五七一	一七、〇四五
	三、八七七	一四、五三四
	二、五九八	

本島の原住民族たる高砂族は概ね中央山脈の連山高地帯に集團部落を成して居住し之を

タイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ、昭和九年末現在蕃社数は五百九十二、戸數二萬四千四百九十六、人口十四萬八千人なり。各種族中人口最も多きはアミ族にして總人口の三割一分七厘を占め、パイワン族の二割八分七厘、タイヤル族の二割三分五厘、ブヌン族の一割二分二厘等順次之に亞ぐ。尚蕃社戸口の累年比較を観るに戸數及人口は漸増し、社數は最近漸減しつゝあり。

(イ) 種族別人口 (昭和九年末現在)

種族	總數		男		女		%
	總數	指數	總數	指數	總數	指數	
タイヤル	一四八、四七二	一〇〇.〇	七四、四〇四	一〇〇.〇	七四、〇六八	一〇〇.〇	二二.五
サイセツト	三四、九五七	一〇〇.〇	一七、二九九	一〇〇.〇	一七、六五八	一〇〇.〇	二二.三
ブヌン	一、四六一	一〇〇.〇	七五七	一〇〇.〇	七〇四	一〇〇.〇	一.〇
ツオウ	一八、〇四八	一〇〇.〇	九、二二二	一〇〇.〇	八、八三六	一〇〇.〇	二.三
パイワン	二、二九一	一〇〇.〇	一、二七六	一〇〇.〇	一、〇一五	一〇〇.〇	一.五
アミ	四二、六二四	一〇〇.〇	二二、四四七	一〇〇.〇	二〇、一六七	一〇〇.〇	二八.七
ヤミ	四七、〇六四	一〇〇.〇	二二、五〇五	一〇〇.〇	二四、五五九	一〇〇.〇	三二.七
その他	一、六八二	一〇〇.〇	八九五	一〇〇.〇	七八七	一〇〇.〇	一.二
其他	四五五	一〇〇.〇	一一三	一〇〇.〇	三四二	一〇〇.〇	〇.三

(ロ) 累年比較 (各年末現在)

年	社數	指數	戸數	指數	人口	指數
大正元年	六五四	一〇〇	二二、九二四	一〇〇	一三三、七三六	一〇〇
同一年	六六九	一〇三	二三、八二一	一〇四	一三三、九二四	一〇〇
同一年	七〇五	一〇八	二三、五二〇	一〇三	一三一、六〇九	一〇七
昭和元年	七四〇	一三三	二三、三二七	一〇二	一三八、六七七	一一三
同一年	七三九	一三三	二三、三三三	一〇二	一三九、三三七	一一三
同一年	七三〇	一三三	二三、四九六	一〇二	一三九、二三四	一一三
同一年	七二〇	一三三	二三、五七六	一〇二	一四〇、一六九	一一四
同一年	七二二	一三三	二三、九二五	一〇二	一四〇、五五三	一一五
同一年	六八九	一〇五	二三、九五四	一〇九	一四二、四三六	一一六
同一年	六五二	一〇五	二四、〇八〇	一〇九	一四四、三〇三	一一八
同一年	五九五	九二	二四、四八〇	一〇六	一四六、九二四	一一〇
同一年	五九二	九二	二四、四九六	一〇六	一四八、四七二	一一三

本島在留外國人の總數は明治三十八年末、八千二百二十三にして大正元年末には、一

萬七千九百二十九人に、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば二萬四千四百六十六人に増加し更に昭和十年十二月末現在に依れば五萬四千九百九人に達せり。
 昭和十年十二月末現在に於ける外國人の國籍を釋ぬるに、中華民國人其の大部分を占め、英人、西班牙人等順次之に亞ぐ。

昭和十年十二月末現在

國名	總數	男	女
中華民國	五、二〇九	三、八八〇	一、八二九
英吉利	五、九〇〇	三、五七六	一、八二三
西班牙	一、三九	六	七二
ソヴェト聯邦	二八	九	九
北米合衆國	一〇	七	三
波蘭	六	四	二
和蘭	六	四	二
比利賓	五	一	五
伊太利	三	一	二
獨逸	三	一	二
滿洲	二	一	一
葡萄牙	一	一	一

六 國勢調査

我が國に於ける國勢調査は明治三十五年國勢調査法の發布に依り確立され、同法を期し第一回調査實施に決定したるも其の後日露戰役の勃發其の他の事由に依り一時同調査を延期し、大正九年に至り始めて帝國全版圖に互り國勢調査は實施されたり。
 然るに本島に於ては既に明治三十八年十月一日臨時戶口調査を行ひ、同調査は純然たる國勢調査の性質と内容を具備し調査の結果も亦良好なりき。是れ假令一植民地に限られたるものにもせよ大正九年第一回國勢調査の十有餘年前、既に完全に近い調査を完了したる事實と功績とは特筆大書に値す。尙大正四年第二次戶口調査を全島に施行し是又優秀なる成果を收めたりき。
 今本島に於ける國勢調査の結果と内地其の他を比較すれば次の如し。

(イ) 實數

帝國內總	昭和十年	昭和五年	大正十四年	大正九年
總數	九七、六九七、五五五	九〇、三九六、〇四三	八三、四五六、九二九	七六、九八八、三七九
内地	六九、二五四、一四八	六四、四五〇、〇〇五	五九、七三六、八三三	五五、九六三、〇五三
朝鮮	二二、八九九、〇三八	二一、〇五八、三〇五	一九、五三三、九四五	一七、二六四、一九
臺灣	五、二二二、四六六	四、五九二、五七七	三、九三三、四〇八	三、六五五、三〇八
樺太	三三、一九三	二九五、一九六	二〇三、七五四	一〇五、八九九

關東州及鐵道附屬地 一、六六、七六
 南洋群島 一〇、三三七
 (大正九年の朝鮮は公簿調査なり、大正九年及同十四年の臺灣には蕃地の高砂族を調査せず昭和五年以後には之を含む)

(口) 指數

帝國	總内地數		朝鮮		臺灣		關東州及鐵道附屬地		南洋群島	
	昭和十年	昭和五年	大正十四年	大正九年	昭和十年	昭和五年	大正十四年	大正九年	昭和十年	昭和五年
總	二七	二七	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
內	二四	二五	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
朝	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
臺	一四	一六	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
樺	三三	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
關東州及鐵道附屬地	一六	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
南洋群島	一六	一三	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

七 本籍別内地人

本島在住内地人の總數は昭和五年十月一日現在國勢調査に於て二十二萬八千二百八十一

人にして内、鹿兒島縣の二萬七千五百六十五人第一位を占め、熊本縣は二萬三千七百五十三人にて之に亞ぎ、福岡縣は遙かに下りて一萬三千二百七十二人を以て第三位に在り、廣島、佐賀の二縣順次に亞ぎ、最も少きは青森縣の四百七十八人なり。

總數	順位
鹿兒島	一
熊本	二
福岡	三
廣島	四
佐賀	五
山形	六
長崎	七
東京	八
神戶	九
大阪	一〇
分府	一一
城崎	一二
崎	一三
瀧	一四
媛	一五
島	一六
本	一七
島	一八
總	一九
數	二〇

和九年末には五百十九萬に達し、大正元年末に比すれば實に五割五分の増加を示せり。更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加率の最も大なるは樺太にして、關東州及鐵道附屬地、臺灣、朝鮮の順位を以て之に亞ぎ内地は最も小なり。

(イ) 性別人口累年比較 (各年末現在)

年	總數	男	女	指數
大正一	三,三五,九四三	一,七六三,四八四	一,五九〇,四五九	一〇〇
同二	三,五〇,一〇〇	一,八二四,一五〇	一,六八五,九六〇	一〇五
同三	三,七五,二七	一,九四一,五八二	一,八〇九,六三五	一〇一
同四	四,一五五,〇六	二,二三,九九八	二,〇三三,〇二八	一〇四
同五	四,二五〇,一六〇	二,一七九,九五三	二,〇七〇,二〇七	一〇七
同六	四,三五二,八八	二,二三二,〇三八	二,一〇〇,七九〇	一〇〇
同七	四,四六二,六三一	二,二八六,七四九	二,一七五,八八二	一〇三
同八	四,五九二,九三	二,三五三,二〇五	二,二三九,七〇七	一〇七
同九	四,七二五,二七八	二,四一三,六二四	二,三〇一,六五四	一〇二
同十	四,九二九,九六二	二,五二一,三五九	二,四〇八,六〇三	一〇七
同十一	五,〇六〇,五〇七	二,五八七,一〇〇	二,四七三,四〇七	一〇二
同十二	五,一四九,九八〇	二,六五六,〇九八	二,五三八,八八二	一〇五

本表昭和六年迄は蕃地に居住する高砂族を除きたるも、同七年以後は之を含む。

(ロ) 内地其他との指數比較 (各年末現在)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州及鐵道附屬地	内地
大正一	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同二	一〇五	一〇三	一〇七	一一五	一〇六
同三	一一〇	一一八	一二六	一二六	一一三
同四	一一三	一二九	一四三	一三七	一一〇
同五	一二〇	一三〇	一五二	一四六	一一三
同六	一二七	一三九	一五七	一五五	一一四
同七	一三〇	一四〇	一五九	一五六	一一五
同八	一三七	一四七	一六六	一六三	一二〇
同九	一四〇	一五〇	一七〇	一六八	一二三
同十	一四三	一五三	一七三	一七〇	一二六
同十一	一四七	一五七	一七六	一七三	一二九
同十二	一五〇	一六〇	一七九	一七六	一三二
同十三	一五三	一六三	一八二	一七九	一三五
同十四	一五七	一六七	一八六	一八三	一三九
同十五	一六〇	一七〇	一九〇	一八六	一四二
同十六	一六三	一七三	一九三	一九〇	一四五
同十七	一六七	一七七	一九七	一九四	一四九
同十八	一七〇	一八〇	二〇〇	一九七	一五二
同十九	一七三	一八三	二〇三	二〇〇	一五五
同二十	一七六	一八六	二〇六	二〇三	一五八
同二十一	一七九	一九〇	二〇九	二〇六	一六一
同二十二	一八二	一九三	二一二	二〇九	一六四
同二十三	一八五	一九六	二一四	二一二	一六七
同二十四	一八八	一九九	二一七	二一四	一七〇
同二十五	一九一	二〇二	二二〇	二一七	一七三
同二十六	一九四	二〇五	二二三	二二〇	一七六
同二十七	一九七	二〇八	二二六	二二三	一七九
同二十八	二〇〇	二一一	二二九	二二六	一八二
同二十九	二〇三	二一四	二三二	二三〇	一八五
同三十	二〇六	二一七	二三五	二三三	一八八
同三十一	二〇九	二二〇	二三八	二三六	一九一
同三十二	二一二	二二三	二四一	二三九	一九四
同三十三	二一四	二二五	二四三	二四一	一九六
同三十四	二一七	二二八	二四六	二四四	一九九
同三十五	二二〇	二三一	二四九	二四七	二〇二
同三十六	二二三	二三四	二五二	二五〇	二〇五
同三十七	二二六	二三七	二五五	二五三	二〇八
同三十八	二二九	二四〇	二五八	二五六	二一一
同三十九	二三二	二四三	二六一	二五九	二一四
同四十	二三五	二四六	二六四	二六二	二一七
同四十一	二三八	二四九	二六七	二六五	二二〇
同四十二	二四一	二五二	二七〇	二六八	二二三
同四十三	二四四	二五五	二七三	二七一	二二六
同四十四	二四七	二五八	二七六	二七四	二二九
同四十五	二五〇	二六一	二七九	二七七	二三二
同四十六	二五三	二六四	二八二	二八〇	二三五
同四十七	二五六	二六七	二八五	二八三	二三八
同四十八	二五九	二七〇	二八八	二八六	二四一
同四十九	二六二	二七三	二九一	二八九	二四四
同五十	二六五	二七六	二九四	二九二	二四七
同五十一	二六八	二七九	二九七	二九五	二五〇
同五十二	二七一	二八二	三〇〇	二九八	二五三
同五十三	二七四	二八五	三〇三	三〇一	二五六
同五十四	二七七	二八八	三〇六	三〇四	二五九
同五十五	二八〇	二九一	三〇九	三〇七	二六二
同五十六	二八三	二九四	三一二	三一〇	二六五
同五十七	二八六	二九七	三一五	三一三	二六八
同五十八	二八九	三〇〇	三一八	三一六	二七一
同五十九	二九二	三〇三	三二一	三一九	二七四
同六十	二九五	三〇六	三二四	三二二	二七七
同六十一	二九八	三〇九	三二七	三二五	二八〇
同六十二	三〇一	三一二	三三〇	三二八	二八三
同六十三	三〇四	三一五	三三三	三三一	二八六
同六十四	三〇七	三一八	三三六	三三四	二八九
同六十五	三一〇	三二一	三三九	三三七	二九二
同六十六	三一三	三二四	三四二	三四〇	二九五
同六十七	三一六	三二七	三四五	三四三	二九八
同六十八	三一九	三三〇	三四八	三四六	三〇一
同六十九	三二二	三三三	三五一	三四九	三〇四
同七十	三二五	三三六	三五四	三五二	三〇七
同七十一	三二八	三三九	三五七	三五五	三一〇
同七十二	三三一	三四二	三六〇	三五八	三一三
同七十三	三二四	三四五	三六三	三六一	三一六
同七十四	三二七	三四八	三六六	三六四	三一九
同七十五	三三〇	三五一	三六九	三六七	三二二
同七十六	三三三	三五四	三七二	三七〇	三二五
同七十七	三三六	三五七	三七五	三七三	三二八
同七十八	三三九	三六〇	三七八	三七六	三三一
同七十九	三四二	三六三	三八一	三七八	三三四
同八十	三四五	三六六	三八四	三八一	三三七
同八十一	三四八	三六九	三八七	三八四	三四〇
同八十二	三五一	三七二	三九〇	三八七	三四三
同八十三	三五四	三七五	三九三	三九〇	三四六
同八十四	三五七	三七八	三九六	三九三	三四九
同八十五	三六〇	三八一	三九九	三九六	三五二
同八十六	三六三	三八四	四〇二	三九九	三五五
同八十七	三六六	三八七	四〇五	四〇二	三五八
同八十八	三六九	三九〇	四〇八	四〇五	三六一
同八十九	三七二	三九三	四一一	四〇八	三六四
同九十	三七五	三九六	四一四	四一一	三六七
同九十一	三七八	三九九	四一七	四一四	三七〇
同九十二	三八一	四〇二	四二〇	四一七	三七三
同九十三	三八四	四〇五	四二三	四二〇	三七六
同九十四	三八七	四〇八	四二六	四二三	三七九
同九十五	三九〇	四一一	四二九	四二六	三八二
同九十六	三九三	四一四	四三二	四二九	三八五
同九十七	三九六	四一七	四三五	四三二	三八八
同九十八	三九九	四二〇	四三八	四三五	三九一
同九十九	四〇二	四二三	四四一	四三八	三九四
同一百	四〇五	四二六	四四四	四四一	三九七
同一百一	四〇八	四二九	四四七	四四四	四〇〇
同一百二	四一一	四三二	四五〇	四四七	四〇三
同一百三	四一四	四三五	四五三	四五〇	四〇六
同一百四	四一七	四三八	四五六	四五三	四〇九
同一百五	四二〇	四四一	四五九	四五六	四一二
同一百六	四二三	四四四	四六二	四五九	四一五
同一百七	四二六	四四七	四六五	四六二	四一八
同一百八	四二九	四五〇	四六八	四六五	四二一
同一百九	四三二	四五三	四七一	四六八	四二四
同二百	四三五	四五六	四七四	四七一	四二七
同二百一	四三八	四五九	四七七	四七四	四三〇
同二百二	四四一	四六二	四八〇	四七七	四三三
同二百三	四四四	四六五	四八三	四八〇	四三六
同二百四	四四七	四六八	四八六	四八三	四三九
同二百五	四五〇	四七一	四八九	四八六	四四二
同二百六	四五三	四七四	四九二	四八九	四四五
同二百七	四五六	四七七	四九五	四九二	四四八
同二百八	四五九	四八〇	四九八	四九五	四五一
同二百九	四六二	四八三	五〇一	四九八	四五四
同三百	四六五	四八六	五〇四	五〇一	四五七
同三百一	四六八	四八九	五〇七	五〇四	四六〇
同三百二	四七一	四九二	五一〇	五〇七	四六三
同三百三	四七四	四九五	五一三	五一〇	四六六
同三百四	四七七	四九八	五一六	五一三	四六九
同三百五	四八〇	五〇一	五一九	五一六	四七二
同三百六	四八三	五〇四	五二二	五一九	四七五
同三百七	四八六	五〇七	五二五	五二二	四七八
同三百八	四八九	五一〇	五二八	五二五	四八一
同三百九	四九二	五一三	五三一	五二八	四八四
同四百	四九五	五一六	五三四	五三一	四八七
同四百一	四九八	五一九	五三七	五三四	四九〇
同四百二	五〇一	五二二	五四〇	五三七	四九三
同四百三	五〇四	五二五	五四三	五四〇	四九六
同四百四	五〇七	五二八	五四六	五四三	四九九
同四百五	五一〇	五三一	五四九	五四六	五〇二
同四百六	五一三	五三四	五五二	五四九	五〇五
同四百七	五一六	五三七	五五五	五五二	五〇八
同四百八	五一九	五四〇	五五八	五五五	五一一
同四百九	五二二	五四三	五六一	五五八	五一四
同五百	五二五	五四六	五六四	五六一	五一七
同五百一	五二八	五四九	五六七	五六四	五二〇
同五百二	五三一	五五二	五七〇	五六七	五二三
同五百三	五三四	五五五	五七三	五六〇	五二六
同五百四	五三七	五五八	五七六	五六三	五二九
同五百五	五四〇	五六一	五七九	五六六	五三二
同五百六	五四三	五六四	五八二	五六九	五三五
同五百七	五四六	五六七	五八五	五七二	五三八
同五百八	五四九	五六〇	五八八	五七五	五四一
同五百九	五五二	五六三	五九一	五七八	五四四
同六百	五五五	五六六	五九四	五八一	五四七
同六百一	五五八	五六九	五九七	五八四	五五〇
同六百二	五六一	五七二	六〇〇	五八七	五五三
同六百三	五六四	五七五	六〇三	五九〇	五五六
同六百四	五六七	五七八	六〇六	五九三	五五九
同六百五	五六〇	五八一	六〇九	五九六	五六二
同六百六	五六三	五八四	六一二	五九九	五六五
同六百七	五六六	五八七	六一五	六〇二	五六八
同六百八	五六九	五九〇	六一八	六〇五	五七一
同六百九	五七二	五九三	六二一	六〇八	五七四
同七百	五七五	五九六	六二四	六一一	五七七
同七百一	五七八	五九九	六二七	六一四	五八〇
同七百二	五八一	六〇二	六三〇	六一七	五八三
同七百三	五八四	六〇五	六三三	六二〇	五八六
同七百四	五八七	六〇八	六三六	六二三	五八九
同七百五	五九〇	六一一	六三九	六二六	五九二
同七百六	五九三	六一四	六四二	六二九	五九五
同七百七	五九六	六一七	六四五	六三二	五九八
同七百八	五九九	六二〇	六四八	六三五	六〇一
同七百九	六〇二	六二三	六五一	六三八	六〇四
同八百	六〇五	六二六	六五四	六四一	六〇七
同八百一	六〇八	六二九	六五七	六四四	六一〇
同八百二	六一一	六三二	六六〇	六四七	六一三
同八百三	六一四	六三五	六六三	六五〇	六一六
同八百四	六一七	六三八	六六六	六五三	六一九
同八百五	六二〇	六四一	六六九	六五六	六二二
同八百六	六二三	六四四	六七二	六五九	六二五
同八百七	六二六	六四七	六七五	六六二	六二八
同八百八	六二九	六五〇	六七八	六六五	六三一
同八百九	六三二	六五三	六八一	六六八	六三四
同九百	六三五	六五六	六八四	六七一	六三七
同九百一	六三八	六五九	六八七	六七四	六四〇
同九百二	六四一	六六二	六九〇	六七七	六四三
同九百三	六四四	六六五	六九三	六八〇	六四六
同九百四	六四七	六六八	六九六	六八三	六四九
同九百五	六五〇	六七一	六九九	六八六	六五二
同九百六	六五三	六七四	七〇二	六八九	六五五
同九百七	六五六	六七七	七〇五	七〇二	六五八
同九百八	六五九	六八〇	七〇八	七〇五	六六一
同九百九	六六二	六八三	七一〇	七〇八	六六四
同一千	六六五	六八六	七一三	七一〇	六六七

本表は拓務統計に依る。

九 出生、死亡及自然増加

本島に於ける出生、死亡及自然増加を觀るに、出生は一般に増加の傾向を有し大正元年の十四萬人(人口千に付四一・九人)より昭和九年の二十三萬人(人口千に付四四・八人)に増加せり。死亡は年に依り多少の相違ありと雖も大體に於て漸減の狀勢にあり、大正元年以降死亡の最も多きは流行性感冒猖獗せる大正七年の十二萬五千人(人口千に付三四・八人)にして、昭和九年には十萬五千人(人口千に付二〇・六人)に減少せり。

次に人口の自然増加も亦年に依り多少の懸隔ありと雖も一般に漸増し、大正七年の如き僅かに二萬五百人の少數に過ぎざりしが昭和九年には十二萬三千五百人の多數に達せり。

尙本島の出生、死亡及自然増加を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 出生、死亡及自然増加

年	出生	死亡	自然増加
大正	一四〇,四九八	八四,九六三	五五,五三五
同	一三三,七七七	一〇二,五二九	三二,一九八
同	一六一,九八七	九一,五二三	七〇,四七四
同	一八三,三六〇	九三,七二〇	八九,六四〇
昭和	一八五,一九五	九四,八四三	九〇,三五三

年	出生	死亡	自然増加
同	一九一,八三九	九六,三二〇	九五,五二九
同	一九七,九六七	九六,八七〇	一〇一,〇九七
同	二〇六,七三三	八九,六五四	一二七,〇七八
同	二二七,二三六	一〇一,〇七七	一二六,〇五九
同	二四一,九二二	九九,一二五	一五,〇六七
同	二二一,三五〇	九八,五〇七	一二三,八四三
同	二二八,六六六	一〇五,一六六	一二三,五〇〇

(ロ) 内地其の他との比較 (昭和九年)

總數	出生	死亡	自然増加
臺灣	二,九三三,二七	一,七六四,七七	一,一七五,六四〇
朝鮮	三,八六六,六	一,〇六一,六六	二,八五五,〇〇
樺太	六二九,四六六	四〇七,二六三	二二二,二〇三
關東州及鐵道附屬地	一一三,四一	五,二二〇	六,三三三
關東州及鐵道附屬地	三五,七一〇	三三,六〇二	三,一〇八
南洋群島	三,三三二	一,六四二	一,四八九
内地	二,〇四三,七八三	一,二三四,六八四	八〇九,〇九九

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、内地は帝國統計年鑑、其の他は拓務統計に依る。

大正十七年五月	同九年九月一日	同九年九月一日	同九年九月一日	同九年九月一日	同九年九月一日	同九年九月一日	同九年九月一日
臺北州	臺北州	臺北廳	宜蘭廳	桃園廳	新竹廳	臺中廳	臺南廳
新竹州	新竹州	新竹廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
臺中州	臺中州	臺中廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
臺南州	臺南州	臺南廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
高雄州	高雄州	阿緱廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
臺東廳	臺東廳	臺東廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
花蓮港廳	花蓮港廳	花蓮港廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州
澎湖廳	高雄州	澎湖廳	南投廳	嘉義廳	臺南廳	高雄州	高雄州

同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日	同十一年三月十六日
臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣
宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳	宜蘭廳
臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣	臺北縣
臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺中縣	臺中縣
臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣	臺南縣
臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳	臺東廳
澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳	澎湖廳

二 行政區劃の沿革

六 警察官署及職員

本島の地方警察機關は昭和九年末現在に於て、州警務部五、廳警務課三、警察署十、郡警察課四十五、支廳十、分室四十四、派出所及駐在所千五百三十九にして、同職員は警視二十四人、警部及警部補五百四十三人、巡査七千四百六十八人、警手三千二百四十三人なり。

今之を内地其他と比較するに、巡査一人に付面積の最も大なるは樺太の七十三方料二にして、朝鮮、内地之に亞ぎ、臺灣は四方料八を以て第四位を占め、最も小なるは關東州及鐵道附屬地の一方料一なり。
 尙人口に就き之を觀るに朝鮮の千百六十九人第一位を占め、内地の千百四十六人、臺灣の六百九十六人、樺太の六百三十五人、關東州及鐵道附屬地の四百四十人順次之に亞ぐ。

臺 灣
 朝 鮮
 樺 太
 關 東 州 及 鐵 道 附 屬 地

警察署	派出所及駐在所	警視	警部及警部補	巡査	面積 方料	人口
空	一、五九九	二四	五三	七、四六八	四八	六九六
二五三	二、五四三	五七	一、二八六	一八、〇七〇	一三三	一、二六九
三	一、三四	三	七	四、九三	七三二	六三五
二五	三八七	一四	一六四	三、四〇三	一一	四四〇

内地
 本島の警察署には郡警察課及支廳を含む。
 内地は帝國統計年鑑、其の他は各廳統計書に依る。

内 地 一三四 一八八五 三九 五二六 五九四八 六四 一二四六

七 農 業

一 農 業 戸 口

本島の農業戸数は昭和九年末に於て四十一萬二千戸、人口二百七十萬人にして一戸當耕地面積は二・〇ヘクタールに當る。
 今之を内地其他と比較するに、一戸當耕地面積最も大なるは關東州及鐵道附屬地の三・〇ヘクタール、樺太の二・七三ヘクタール之に亞ぎ、本島は第三位を占め、内地は一・〇七ヘクタールを以て最下位に在り。

	戸 數	人 口	昭和九年末現在 一戸當耕地面積 ヘクタール
臺 灣	四二、九八一	二、七〇〇、九二〇	二・〇〇
朝 鮮	三〇、三、一〇四	?	一・六二
樺 太	二、五九三	五八、五二四	二・七三
關東州及鐵道附屬地	六七、〇五六	二五四、九四七	三・〇四
南 洋 群 島	二、六三五	三二、七二六	一・五三
内 地	五、六一七、四八六	?	一・〇七

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

二 耕地面積

本島の耕地總面積は八十二萬六千ヘクタールにして内、田四十四萬九千ヘクタール、畑三十七萬七千ヘクタールにして其の割合は田五割四分、畑四割六分なり。
 今本島の田及畑の面積を内地其の他と比較すれば次の如し。

耕地面積(ヘクタール)

昭和九年末現在

總數	田		畑	
	面積	%	面積	%
臺灣	八二五,七〇九	四八,九八〇	三七六,七二九	四五,四
朝鮮	四,八八七,三七九	一,六七八,七四四	三,二〇八,六三五	三三,三
樺太	三二,五九七	—	三二,五九七	—
關東州及鐵道附屬地	二〇三,七三三	一,二一九	二〇二,六三三	〇,五
南洋群島	一七,七五〇	一,三八八	一六,三六二	七,八
内地	五,九八七,七四八	三,一九一,八四三	二,七九五,九〇六	五,三,三
關東州及鐵道附屬地	—	—	—	—
關東州及鐵道附屬地	—	—	—	—

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

三 農 産

本島の農産物は、昭和九年中の總生産價額二億五千七百萬圓にして内、普通作物の一億

八千九百萬圓最も多く、總生産價額の七割四分に當り、特用作物の四千四百萬圓(一割七分)之に亞ぎ、園藝作物の二千四百萬圓(九分)最も少し。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億六千五百萬圓を以て第一位を占め、總額の六割四分に當り、甘蔗は三千萬圓(一割二分)を以て之に亞ぎ、甘藷の二千二百萬圓(九分)、蔬菜類の一千百萬圓、粗製茶の七百五十萬圓、バナナの六百二十萬圓、落花生及鳳梨の各二百八十萬圓、柑橘の二百萬圓等順次之に亞ぐ。
 尙本島の農産額を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 農 産 物 (昭和九年)

總 額	生産價額(圓)	%	作付面積(甲)	收穫高
普通作物	二七,〇四,三三二	一〇〇.〇	—	—
米(玄米)	一八,七〇,一九四	七三.四	—	—
甘蔗	一六五,一七五,三九九	六〇.三	六八四,五〇三	九,〇八八,八八石
甘藷	二,八九〇,三五七	八.五	一四二,四四八	二,六〇九,三二八千斤
豆類	一,一〇五,三三三	〇.四	一八,九三五	七五,二六一石
麥類	一三三,〇九六	〇.〇	一,三八七	一一,六五七石
其他	三九八,七五九	〇.二	—	—
特用作物	四,二三三,九九九	一七.二	—	—

甘蔗	粗製茶	落花	煙草	麻類	胡椒	藍	香花	其他	園藝作物	柑	龍眼	檳榔	椰子	李	蔬菜	其他	
三〇,三四三,二六	七,五四六,八六九	二,八三二,六五六	一,三三八,九〇六	一,六九二,六二二	二〇二,七〇九	二九,七三二	二〇四,三三五	一六一,九二五	二四,〇七九,二九八	六,一九四,二六〇	二,〇一四,〇二五	五三〇,六〇三	一六四,四八五	二,七八七,二四一	一四八,二九四	二五五,五〇九	一一,四七二,五八八
一九	二九	一一	〇五	〇六	〇一	〇〇	〇一	〇一	九四	二四	〇八	〇二	〇一	〇一	〇〇	〇〇	
九一,一六三	四五,七六六	三一,七二六	九五	六,七四九	三,九四八	四一九	二七一	?	一九,〇六二	四,四九二	二,二九〇	六,八八一	五,四三	八六六	?	?	
八,八八三,八〇二斤	一八,三九二,〇二八斤	五六六,一八三石	三五,六七,四二五斤	一七,四七〇,四七九斤	一二,五九五石	?	一,〇六六,九六九斤	?	三〇二,四一八千斤	五五,二二三,三四一斤	一七,七九五,八〇四斤	六,二八一,四三二斤	八五,四六六,九四七箇	五,五七一,七四七斤	二〇,三八三,七五八斤	?	

(口) 内地其他との比較 (昭和九年)

總額	臺灣	朝鮮	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島	内地
三,三三五,四七,六六九	二,七〇四,二五一	七四六,三三二,九二二	四,〇五八,九三〇	二七,四七四,〇二二	三,三四七,三九一	二,一八七,一〇〇,一六三
100%	八〇	二二	〇一	〇九	〇一	六七

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

八畜産

本島の畜産物生産總價額は、昭和九年に三千五百八十萬圓を算し内、家畜生産の二千八百九十萬圓第一位を占め總價額の八割一分に當り、家禽生産の六百萬圓（二割七分）、牛乳の六十萬圓（二分）等順次之に亞ぐ。
 家畜生産中、豚の二千六百七十五萬圓（七割五分）最も多く、水牛の百四十三萬圓（四分）之に亞ぎ、家禽生産中最も多きは鶏の四百七十萬圓（一割三分）なり。

生産價額(圓)

%

總家畜額	三、七九、〇三九	100.0
水牛	二八、七五、八二八	八〇.六
黄牛	一、四三、一〇六	四.〇
雜種牛	三二七、六三三	〇.九
其他牛	一六三、六八〇	〇.五
豚	四一、五三四	一.一
山羊	二六、七五〇、四六三	七.四
其他羊	一五八、五五三	〇.四
其他禽	一一、八六九	〇.〇
其他	六〇四、二〇六	一.六

生蜂牛 七鷺鷺鷄
面
皮蜜乳鳥

四、六八七、一五三
九四六、〇四六
三六七、七七八
四三、三三九
五五、二八
九、六四三
二八、三四
一三二
二七
一〇
一六
〇三
〇六

九 林 業

一 林 野 面 積

本島に於ける昭和九年末現在の林野面積は二百五十二萬甲にして内、森林は百九十五萬甲(七割七分)、原野は五十七萬甲(二割三分)なり。尙林野面積を本島の總面積三百七十萬七千六百五十七甲に比すれば實に其の六割八分を占む。次に本島の林野面積を所有者別に觀れば森林及原野とも國有最も多く、前者は森林面積の八割九分、後者は原野面積の九割一分を占め、之に亞ぐは私有にして公有最も少し。更に本島の林野面積を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 林野面積 (單位甲)

總 數	森 林	原 野	森林	原野
二、五二〇、〇九一	一、九五〇、五二六	五六九、五六五	七七四	三三六
二、二五〇、六〇七	一、七三三、三三四	五二八、三三三	七七〇	三三〇
一、三、四六七	一一、二七一	二、一九六	八三七	一六三
二、五、〇二七	二〇七、〇二二	四、八九六	八〇九	一九二

(ロ) 内地其の他との比較 (単位陌)

内地	樺太	朝鮮	臺灣	總數	森林	原野
内地は昭和八年末、其の他は昭和九年末現在にして拓務統計に依る。	二、九〇四、二九四	一六、二一〇、九〇二	二、四四四、三八七	二、四四四、三八七	一、八九一、九〇九	五、五三二、四七六
	三、六四五、七三二	?	?	?	?	?
	二〇、五七五、九三三	?	?	?	?	?
	三、〇六九、八八八	?	?	?	?	?

二 林 産 産

本島の林産物生産總價額は昭和九年に一千二百六十三萬圓を算し内、用材の四百二十萬圓第一位を占め、總價額の三割三分に當り、森林副産物の二百七十五萬圓(二割二分)、薪の二百二十萬圓(一割八分)、竹材の百八十五萬圓(一割五分)、木炭の百五十五萬圓(一割二分)等順次之に亞ぐ。

次に各内譯の第一位を觀るに用材は丸太の二百九十萬圓(二割三分)、竹材は蒨竹の九十萬圓(七分)、森林副産物は筍の八十萬圓(六分)なり。

尙本島の林産額を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 林 産 物 (昭和九年)

總 用	丸太	小丸	角丸	薪	木	竹	蒨竹	桂竹	蒨竹	蔴竹	長枝	其の他	森林副産物	筍	龍眼	竹	
額	太	太	材	他	材	炭	材	竹	竹	竹	竹	竹	物	物	肉	皮	
三、六三〇、〇一一	四、三六、七三四	二、九一、六四三	三七五、六八七	四七〇、九六五	四七八、四二九	二、三三九、三三三	一、五四九、七二六	一、八四九、三五五	五五五、七六三	九〇八、二九六	二、三三、八二二	一一〇、九〇一	五〇、五七四	二、七四七、一九七	七九七、八二〇	二七八、八三四	四三三、一三二
100.0	三三.五	二三.〇	三.〇	三.七	三.八	二七.七	二三.三	一四.六	四.四	七.二	一.七	〇.九	〇.四	二.八	六.三	二.二	三.四

生産價額(圓)

%

姜 樣 土 鳳 檳 其
黃 實 石 梨 實 榔 的 其
〇五 〇三 三七 一九 〇七 二八 〇一

(ロ) 内地其他との比較 (昭和九年)

姜	六五、四六四	〇五
樣	四〇、〇二五	〇三
土	四六九、〇八三	三七
鳳	二三四、三五四	一九
檳	八三、一一五	〇七
其	三四五、四〇〇	二八
の	一七、七九六	〇一

總

臺灣 朝鮮 太 南洋 内
額 鮮 島 洋 地
本表は拓務統計に依る。

價額

臺灣	四三五、三六、七六九
朝鮮	三、三、〇、〇一一
太	一〇六、〇、一、〇〇〇
南洋	二二、一、三、二九四
内	三、一、八、一、三五八
地	二九一、四〇八、〇九六

%

臺灣	一〇〇.〇
朝鮮	二九
太	二四.四
南洋	五.一
内	〇七
地	六六.九

一〇 鑛 産

本島に於ける昭和九年鑛産總價額は一千八百九十萬圓にして前年に比し三百七十五萬圓を増加せり。
次に鑛産物の内譯を觀るに金銅鑛の五百萬圓第一位を占め總價額の二割六分に當り、金の三百二十萬圓(一割七分)、カーボンブラツクの五十萬圓、金銀澱物の四十五萬圓等順次に亞ぐ。

尙本島の鑛産額を内地其他と比較すれば別記の如し。

(イ) 鑛 産 物 (昭和九年)

總 額	産 額	價 額	% (價額)
金	一、〇〇二、九二八瓦	一八、九七、六六七	一〇〇.〇
沈	二、二九九、一六八瓦	三、一六九、三九三	一六七
金	一三〇、二九七瓦	三、七、九七〇	一七
砂	四三、二六九瓦	五、〇〇八、八二二	二六.四
金	一二七、〇一瓦	九、四〇八、三六三	四九.七
銀	—	—	—
澱	—	—	—
銅	—	—	—
鑛	—	—	—
物	—	—	—
他	—	—	—

カーボンブラック

一、三六七、一九七

四八、二六七

二六

(ロ) 内地其の他との比較 (昭和九年)

産地	價額	%
總	五九、七四五、二四三	100.0
臺	一八、九四七、六六七	三三
朝鮮	六九、二七二、九四〇	一二七
樺太	九、二九、二六一	一六
關東州及鐵道附屬地	六二、七八四、四八九	一〇五
南洋群島	一、七八、七五〇	〇三
内地	四八、九四三、二三五	七二七

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

一一 水産

本島の水産總價額は、昭和九年には一千六百六十三萬圓を算し内、遠洋漁獲物の七百二十三萬圓第一位を占め、總價額の四割四分に當り沿岸漁獲物の四百二十二萬圓(二割五分)、養殖場漁獲物の二百八十九萬圓(一割七分)、水産製造物の二百二十九萬圓(一割四分)順次に亞ぐ。

次に各内譯の第一位を觀るに遠洋漁獲物は旗魚の百三十八萬圓(八分)、沿岸漁獲物は鯛の八十五萬圓(五分)、養殖場漁獲物は虱目魚の百七十萬圓(一割)、水産製造物は節類の五十五萬圓(三分)なり。
更に是を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 水産物

總	價額(圓)	%	數量(斤)
總	一、六六三、六〇四	100.0	—
遠洋漁獲物	七、三三三、九九五	四三・五	—
鯛	一、〇五三、三二七	六三	八、五〇七、六八二
鯉	二〇六、〇九一	一二	三、〇七〇、三七三
鱈	五八六、五八六	三五	一〇、五九七、二六六

貝類 其他の水産動物類 藻類 養殖場漁獲物 虱目魚 鯉魚 草魚 牡蠣 其の他 節類 煮乾類 惣類 蒲鉾 鰯 鱈 海草 其の他

五二、五〇七
三九一、九五〇
五四、七二八
二八九〇、三四〇
一、七〇五、八六五
一九二、九一五
一六二、七九九
三八九、八二四
一〇九、〇二九
三三九、九〇八
二、二九〇、九三三
五四六、六六五
四五〇、八七四
一四四、三八八
二二三、七二六
一一〇、三二三
二四〇、四六〇
一〇四、九九一
四五九、五〇六

〇三
二四
〇三
一七四
一〇三
一二
一〇
二二
〇六
二〇
二三八
三三
二七
〇九
一四
〇七
一四
〇六
二八

八六三、六三八
五二一、五三七
一一、四三六、七五六
一、二八二、二一八
一、一三三、二一九
九、三四四、三二〇
七二三、五八七
二七七、一五五
四、四八一、九〇六
一、三三〇、七三七
七九六、八七五
六三、一三〇
二三五、〇四九
五二四、九五五
?

鰯魚 黃魚 旗魚 狗魚 鮫魚 其の他 珊瑚 鯨魚 沿岸漁獲物 鰻魚 鰺魚 鱈魚 鯉魚 鰻魚 鰻魚 虱目魚 其の他魚類

一八、五九四
七〇一、二三三
四七七、二四一
一、三八一、二八五
一八一、七〇〇
二二二、六七五
一四〇、二二三
一、九二一、一九〇
二〇八、〇一八
五五、八六三
四、二七三、三四六
一八六、八四七
四六七、二七〇
八四七、七四三
二七六、九七八
二九六、三四四
一三八、五四七
一、二七五、〇三
一、三八六、九二九

〇七
四二
二九
八三
一一
一三
〇九
一五
一三
〇三
二五三
二八
五一
一七
一八
〇八
〇七
八三

六四七、一八〇
五、一六三、三七七
五、九八八、六六八
七、三七七、八五一
二、四六九、九一七
二、五〇九、三五四
二、五四三、〇五一
一、一七〇
三、七九、四六〇
一、〇〇一、五四〇
七、二七七、六九四
一七、四六一、五七八
二、一五一、九八五
一、三九三、五七一
二、二七八、〇六五
二四、二九八、四六六
?

(ロ) 内地其の他との比較 (単位千圓)

總額	漁獲物	水産製造物	水産養殖物	%
五九三、一四六	三三四、九八一	三三〇、〇六九	二八〇、八六六	100.0
一六六、六三三	一一、四三三	二、二九二	二八九〇	二八
一〇六、二二九	五七、七七八	四五、五二五	二八四六	一七九
一九、二〇五	六、八三三	一一、三三三		三二
六〇、三七七	五、〇二六	一、〇三二		一〇
四、四八八	二、六四五	一、八一		〇八
四〇、六四四	二五、二七六	一六七、〇四六	三三、三二八	七四三

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

一二二 工業

本島の工業生産總價額は、昭和九年に二億一千六百萬圓を算し内、砂糖の一億二千萬圓は群を抜いて第一位を占め、再製茶の一千百萬圓、酒精の七百九十萬圓、罐詰の六百三十萬圓、鐵工の六百萬圓、蜜餞及菓子子の五百二十萬圓、帽子の五百十萬圓、糖蜜の四百四十萬圓等順次に亞ぐ。尚本島の工産額を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 工産物 (昭和九年)

總額	生産價額(圓)	%
砂糖	三、五三九、二〇八	100.0
酒	二、九七五、七四五	五五五
再製茶	七、九四四、六七九	三七
製糖用其の他の機械器具及原動機	一〇、八九四、二八三	五二
木製	三、六七九、五七九	一七
木製	四、一七八、五五七	一九
木製	三、八一〇、六一八	一八

一三 糖 業

本島の糖業は領臺當時其の栽培製糖共に幼稚にして僅々八、九千萬斤の粗糖を製産するに過ぎず、需要の四分の三は海外の供給に俟つ状態に在りき。茲に於て糖政の確立、糖業獎勵規則の制定、原料採取區域の限定、蔗苗取締規則の制定其の他諸種の糖業研究機關の設置等に依り爾來顯著なる發展をなせり。明治三十五年期に於ては八千二百六十萬斤を産するに過ぎざりしが、大正十年期には四億二千百萬斤、即ち五倍の産額を見るに至り、昭和十年期に於ては、公稱資本金二億三千五百萬圓、作業工場數百四十三、作業能力四萬五千二百五十噸を有し、其の製糖高十六億千萬斤十九倍強に達せり。内新式製糖會社の數は九にして作業工場數四十七、作業能力四萬三千九百噸を有し、その製糖高十五億七千百萬斤なり。

總 數	公稱資本金 千円	作業工場數	作業能力 噸	製糖高 千斤	% (製糖高)
新式製糖會社	二、三、八、八、三	一、三、三	四、五、三、〇	一、六、〇、九、三、〇	一〇〇.〇
臺灣製糖	三、三、三、五、〇	四、七	四、三、九、〇	一、七、一、二、八、六	九七.六
新興製糖	六、三、〇、〇、〇	一、三	一、一、八、二、四	四、〇、四、二、七、五	二五.一
明治製糖	一、一、〇、〇、〇	一	五、六、〇	一、八、七、五、六	一一.一
大日本製糖	四、八、〇、〇、〇	七	八、五、二、〇	三、六、八、〇、六	一九.七
	六、一、九、七、〇	九	一、〇、九、三、三	四、七、〇、六、九	二五.三

鹽水港製糖	二九、二五〇	六	五、八八〇	二四、五二一	一五二
帝國製糖	一八、〇〇〇	五	三、三三四	一三、七三三	七一
昭和製糖	七、〇〇〇	四	二、二〇六	四、七四八	二六
臺東製糖	一、七五〇	一	三九二	一三、九九九	〇九
三五公司	三、三五〇	一	三九二	九、二七九	〇六
改良糖廠	一、三六二	七	四四〇	一六、六七〇	一〇
舊式糖廠	?	八	八九〇	三、七七七	一四

昭和十年期とは昭和九年十一月より同十年十月に至る期間を謂ふ。

一四 貿易

一 貿易總覽

本島の貿易は之を外國貿易及内地貿易（臺灣内地間）の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進み、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破し、大正十年及十一年は一般商業界並に産業界停滯沈靜を極めし爲め、二億八千萬圓に減退せるも大正十二年には三億圓臺に復活、大正十四年には四億四千九百萬圓を現出せり。

昭和元年以降は四億三千萬圓臺を上下し、昭和四年に一時四億八千萬圓に反撥せしも同五年には四億圓に激減、同六年には大正十四年以後保持したる四億圓臺を割り三億六千萬圓に減少し同七年には四億五百萬圓に復活同八年には四億三千四百萬圓に漸増し同九年には五億二千百萬圓を以て本島貿易史上空前の巨額に達せり。今昭和九年の貿易總額を人口一人當りに換算すれば百圓三十錢を示す。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を観るに、内地貿易は常に七〇%以上を占め昭和九年には八七・六%を現出せり。内地と本島とが國家經濟の見地よりして多々益々密接不離の有機的關係を保持し愈々其の重要性を増大しつつあるは以上に依りても明白なる事實なり。

(イ) 貿易總表 (單位千圓)

年	總額	指數	外國貿易	內地貿易	外國貿易 %	內地貿易 %	一人當口平均
大正一	一三、四四四	一〇〇	三、四二七	九、一五七	二七三	七二七	三、六五
大正二	一七、七三〇	一四一	四、七〇三	一三、〇二七	二六五	七三五	四、九三
大正三	二八、三九三	二一八	六、三九五	二二、〇四八	二二三	七七七	七、四七
大正四	四四、八三七	三三〇	一一、三三三	三三、五四四	二五六	七四四	一〇、二五
大正五	四三、六三五	三二六	一一、〇四八	三二、五八七	二五五	七四五	一〇、〇〇
大正六	四九、〇七一	三三〇	九、二三一	三九、八四〇	二一〇	七九〇	九、八九
大正七	四七、八〇四	三二〇	九、七七一	三八、〇七五	二〇五	七九五	一〇、四八
大正八	四〇、九七〇	三三七	六、七九〇	三四、一七六	一六六	八三四	八、七六
大正九	三六、四九五	二九二	五、〇三八	三一、一八七	一三七	八六三	七、六三
大正一〇	四〇、三二六	三三三	四、〇八六	三六、二四〇	一一一	八八九	八、二二
大正一一	四三、八〇二	三四六	五、一四三	三八、〇六九	一一三	八七七	八、五七
大正一二	五〇、九三〇	四二五	六、四五四	四四、四八一	一二四	八七六	一〇、〇三

(ハ) 内地貿易 (單位千圓)

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正一	三、四二七	一〇〇	一、四九六	一、九三〇	四、三四七
大正二	四、七〇三	一三七	三、一六五	一、五三四	一、六三三
大正三	六、三九五	一八七	二、三五四	四、〇三三	一、六八二
大正四	一一、三三三	三三五	四、九三一	六、二〇八	二、二六二
大正五	一一、〇四八	三三三	四、五九八	六、五八四	二、二四三
大正六	九、二三一	三三三	三、八九六	五、八三三	二、四四〇
大正七	九、七七一	二八九	三、一八八	六、四五四	三、三三三
大正八	六、七九〇	一九八	二、三〇九	四、五一一	二、二〇〇
大正九	五、〇三八	一四七	一、九四九	三、〇八九	一一、四二〇
大正一〇	四、〇八六	一四三	一、八〇四	三、一〇四	一一、九九六
大正一一	五、一四三	一五五	一、七六六	三、四七七	一七、八一〇
大正一二	六、四五四	一八八	二、六五八	三、八〇三	一一、五二三

△は輸出超過なり。

(ロ) 外國貿易 (單位千圓)

年	總額	指數	移出	移入	移出超過
大正一年	九二,七〇七	一〇〇	四七,八三一	四三,三三五	四,五〇六
同二年	一三〇,二八七	一四三	八〇,六九五	四九,五九二	三一,一〇四
同三年	一三三,四一八	一四四	一二八,八九七	九三,五二一	三五,三七六
同四年	一三三,五五五	一四五	一二〇,一一〇	一一,四〇五	八〇,七〇五
同五年	一三三,一八七	一四五	一二〇,〇七九	一一,二〇八	八〇,九七一
同六年	一三六,八四〇	一五〇	一二四,五三三	一一,三三八	八二,二〇三
同七年	一三七,〇七五	一五〇	一二八,七〇五	一四〇,三七〇	九八,三三六
同八年	一四一,七六〇	一五五	一三〇,四二四	一一四,七六三	九五,五〇六
同九年	一三六,一八七	一四七	一二二,六八三	一三三,四五七	八六,六六一
同十年	一三五,一四〇	一四一	一二〇,七四七	一四九,九二二	八九,二二六
同十一年	一三八,〇六九	一四八	一二〇,七四七	一四九,九二二	八〇,八三五
同十二年	一四六,四〇一	一五〇	一二九,四一〇	一七六,九九一	一〇一,四二〇

二 對手國別外國貿易

本島の外國貿易は内地同様大體に於て例年輸入超過なり。而して對手國中其の歴史的地理的關係より對岸中華民國は累年主要の地位を獨占し、輸出に於て多きは六割、少きも三割、輸入に於ても多きは五割二分、少きも三割五分を多年保持したりしが、昭和七年滿洲

事變を契機として國民政府の執拗なる排日貨政策及び滿洲國獨立等に影響され昭和九年には輸出三割二分輸入一割八分にして昭和八年と共に記録的激減振りを示せり。今昭和九年の外國貿易に就きて觀るに總額六千四百五十萬圓中、輸出額は二千六百五十七萬圓にして中華民國の八百三十八萬圓最も多く三割二分に當り、北米合衆國の五百四十七萬圓(二割一分)、香港及關東州の各二百九十萬圓(二割一分)等順次之に亞ぐ。次に輸入總額三千八百萬圓中第一位を占むるは滿洲國の千六百六十萬圓にして四割四分に當り、中華民國の六百七十萬圓(一割八分)之に亞ぎ、獨逸の三百七十萬圓(一割)、北米合衆國の二百二十萬圓、英領印度の二百十五萬圓、英吉利の二百十萬圓の各順位に在り。

(イ) 輸 出 (單位千圓)

總額	關東州	中華民國	滿洲國	香港	蘭領印度
昭和九年	二六,五三八	二八,九六六	八,三七五	四,三九	一,五〇九
同八年	一七,六六六	一六,二五	四,七四六	三,五〇	一,〇九五
同七年	一八,〇四	一九,七三	六,五三四	—	一,六〇一
同六年	一九,四九	三〇,九	八,三三	—	三,二六二
同五年	三二,八〇九	六,一〇	一〇,一〇四	—	四,一七五
同元年	四九,三三五	一,二六二	二九,七六〇	—	四,四八八

暹羅	四二七	三二九	一二五	一三三	四三	八七四
英領印度、海峽植民地及英領ボルネオ	五七九	二二六	九七	三八	八三	五七九
比律賓諸島	二	八三	八二	七五	六一	三七五
佛蘭西	二五八	四三四	二九〇	二七	二五四	二三四
獨逸	五九	元	二二	二	二	一三三
英吉利	一七五四	一、二二三	六〇五	八六六	一、二五〇	九六六
北米合衆國	五、四六六	四七一九	三、七五四	三、四五六	二、八〇三	六、二四一
其他	一、八二〇	八七四	三〇一	三七二	三九二	四二〇

(口) 輸 入 (單位千圓)

總額	三六、〇三二	三五、四七七	三三、〇四一	三〇、八五九	四三、一三二	六三、〇〇八
關東州	一、三九三	九五六	九三三	八八九	八二	二、〇三三
中華民國	六、七三三	六、六七一	一、五六二	一、六一九	三、六六〇	二、七、二七
滿洲國	一、六、六二七	一、六、六〇四	四、〇三〇	—	—	—
佛領印度支那	一〇八	二〇五	一六三	二二	二九九	六八九
蘭領印度	一、五四二	一、三八九	一、六三三	一、〇三五	一、二二二	四、一〇〇
暹羅	一六〇	六三五	一、三九〇	一七〇	一、〇三一	一、七三六

英領印度	二、二四九	二、二七五	一、五四七	一、三二七	二、二二三	一〇、五七三
海峽植民地及英領ボルネオ	一、二五	二、六三	一七八	一、二四	一、二四	四、二九
濠太刺利	二、五八	二、六六	三、六三	一、九六	三、〇六	八〇五
イラソン	二、二九	一、二二	七〇九	一、〇〇五	一、二二五	六八七
獨逸	三、七〇五	三、三九一	一、九四一	四、〇二四	七、二九七	五、五九六
英吉利	二、〇七八	三、六〇	五九八	二、三四四	二、四四五	二、七〇五
北米合衆國	二、二〇一	一、八四一	一、五四八	二、二七〇	四、二六〇	二、一〇二
加奈陀	—	八二	二七〇	三七四	七二七	七九四
其他	八五三	四二五	一六七	七〇〇	六二一	二、五四三

(ハ) 本島に於ける開港場

I 普通開港場	基隆 (臺北州)	高雄 (高雄州)	安平 (臺南州)	淡水 (臺北州)
II 特別開港場 (支那型船のみに限り出入を許せるもの)	後龍 (新竹州)	鹿港 (臺中州)	東石 (臺南州)	馬公 (澎湖廳)

三 中華民國、香港及南洋貿易

本島に於ける外國貿易中種々なる點より最も密接なる關係を有する中華民國、香港及南洋との貿易を再檢するに經濟界の狀勢に依り年々多少の相異あるを免れざるも東亞に於ける帝國の國策的使命及地理的狀勢より見て益々其の重要性を加へつゝある事は確實なり。即ち昭和九年に就きて觀るに、輸出額は千四百六十萬圓にして輸出貿易總額の五割五分を占め輸入貿易は、千百三十萬圓にして輸入貿易總額の三割に當れり。

(イ) 輸 出 (單位千圓)

總額	中華民國	香港	南洋
昭和九年	一四、五九九	八、三三五	二、九〇九
同八年	八、八三五	四、七四六	二、二二二
同七年	二二、二三三	六、五三四	二、六七〇
同六年	一四、四一〇	八、三三三	二、五八七
同五年	一七、五〇一	一〇、一〇四	三、〇三二
同元年	四〇、二八一	二九、七六〇	四、四八八

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度支那、暹羅及濠太刺利を謂ふ。以下亦同じ。

(ロ) 輸 入 (單位千圓)

總額	中華民國	香港	南洋
昭和九年	一一、三〇二	三、三三三	四、五五六
同八年	二、七七一	五、〇四五	五、二七五
同七年	二〇、九七七	三、一三一	五、二七五
同六年	一九、三二八	一、六八九	二、九八七
同五年	二七、九四四	三、六六〇	五、二二四
同元年	四五、五九五	二、七二七	一、八三二

外國貿易總額に對する%

(ハ) 比 例

年	昭和一	同五	同六	同七	同八	同九
輸 入	八七	七六	六三	六二	五〇	三六
輸 出	三三	二四	三三	三三	二二	一〇
總 數	一二〇	一〇〇	九六	九六	七二	四六

中華民國 香港 南洋

茶 砂糖 樟腦 乾鱈 酒 蜜柑 鳳梨 バナナ 鱈

品名	昭和九年	同八年	同七年	同六年	同五年	同元年
茶	八、九一八	五、四四六	四、八七〇	七、三六三	八、六九二	一、三三四五
砂糖	一、三三	五、六三	三、一七四	二、三三七	六、三三	三、一七八
樟腦	二、三八二	二、九六三	一、五四八	一、五八六	一、二四八	一、九四九
乾鱈	四、三三	二、〇九	二、三九	一、二七	三、三三	五、六五
酒	三、三三	二、〇九	二、三九	一、二七	六、七七	一、六八九
蜜柑	二	三、〇八	五、一九	三、三〇	一、四八七	二、〇〇一
鳳梨	五、五〇	一、九六	二、六九	一、二八	三、三三	一、九二八
バナナ	七、四六	四、二八	四、三五	八二	一、五三	一、八九
鱈	五、三三	三、五八	二、四〇	四三	六二	一、八九
ナ	六、七三	三、五七	一、六三	二、〇〇	三、〇一	四、四七
寸ナ	六、八四	二、二〇	一、八八	一、五六	三、四	一、七七
鱈	七、七四	一、五三	六五	七	五、九七	一、九三八

(イ) 輸 出 (單位千圓)

り、硫酸アンモニウムの五百五十萬圓(一割五分)、ガンニ一囊の三百三十萬圓(九分)、大豆の二百七十萬圓、麩の二百五十萬圓等順次之に亞ぐ。

中華民國、香港、南洋貿易、總額に對する%

四 重要品別外國貿易

品名	昭和九年	同八年	同七年	同六年	同五年	同元年
茶	九	八	七	六	五	一
砂糖	輸	輸	輸	輸	輸	輸
樟腦	入	入	入	入	入	入
乾鱈	出	出	出	出	出	出
酒	輸	輸	輸	輸	輸	輸
蜜柑	輸	輸	輸	輸	輸	輸
鳳梨	輸	輸	輸	輸	輸	輸
バナナ	輸	輸	輸	輸	輸	輸
鱈	輸	輸	輸	輸	輸	輸
ナ	輸	輸	輸	輸	輸	輸
寸ナ	輸	輸	輸	輸	輸	輸
鱈	輸	輸	輸	輸	輸	輸

本島の外國貿易中輸出品の主なるものは、茶、砂糖及樟腦等なり。今昭和九年に就きて之を觀るに、茶は八百九十萬圓を以て第一位を占め輸出總額の三割四分に當り、樟腦の二百四十萬圓(九分)、鱈の八十萬圓、蜜柑の七十五萬圓、燐寸及バナナの各七十萬圓等順次之に亞ぐ。

次に輸入品の主要なるものは大豆油粕、硫酸アンモニウム、麩、大豆及ガンニ一囊等に於て、昭和九年には大豆油粕の一千二百二十萬圓第一位を占め、輸入總額の三割二分に當

(ロ) 輸入 (單位千圓)

品名	昭和九年	同八年	同七年	同六年	同五年	同元年
大豆油粕	11,204	11,593	10,342	7,354	10,253	13,744
阿片	133	1,491	708	1,229	1,133	987
米	—	483	1,940	57	1,101	9,275
包豆	427	502	489	528	512	898
杉材及杉板	2,656	3,039	1,801	1,537	2,698	3,228
葉鐵及葉鋼	107	274	541	1,040	1,380	2,237
硫酸アンモニウム(粗製)	682	634	740	380	947	566
ウヰム(粗製)	5,524	3,837	2,267	619	785	6,804
ガンニー囊(故共)	3,270	2,718	1,337	1,653	2,408	2,486
麩	2,477	2,075	1,508	1,106	2,105	637
葉煙草	397	582	328	276	343	755
鯨	328	178	225	133	347	801

五 重要品別内地貿易

本島の内地貿易中主要なる移出品は砂糖、米、バナナ、鑛、樟腦油、鳳梨罐詰及バナマ帽及酒精等なり。今昭和九年に就きて之を觀るに、砂糖は一億二千二百萬圓を以て第一位を占め、移出總額の四割四分に當り、第二位は米の一億二百萬圓(三割六分)にして前記兩者のみにて實に移出總額の八割を占む。其の他は何れも一千万圓以下にして、バナナの八百九十萬圓、鑛の七百五十萬圓、酒精の五百三十萬圓、鳳梨罐詰の四百五十萬圓、帽子の三百九十萬圓、鮮魚介の二百四十萬圓、樟腦の二百二十萬圓等順次之に亞ぐ。

次に主要なる移入品は綿織物及絹織物、肥料、鐵、酒類、鹽鱈、杉材及杉板、紙、小麥粉等にして、昭和九年には綿織物及絹織物の千七百二十萬圓第一位を占め、鐵の千五百五十萬圓、硫酸アムモニウムの七百六十萬圓、杉材及杉板の五百四十萬圓、紙の四百五十萬圓、鐵製品の四百三十萬圓、小麥粉の三百四十萬圓、ガンニー囊の三百二十萬圓、清酒の三百十萬圓等順次之に亞ぐ。

(イ) 移出 (單位千圓)

品名	昭和九年	同八年	同七年	同六年	同五年	同元年
砂糖	13,333	12,614	13,779	12,045	14,165	9,376
米	101,825	64,633	63,033	41,067	38,695	63,092
精腦	5,256	5,455	2,976	3,054	2,592	4,081
樟	2,276	1,274	964	766	1,256	1,682

樟腦油	一、九〇二	一、五五五	二、〇六二	一、八二五	二、四三二	二、九七六
鑛魚介	七、四九三	六、一四四	四、九五四	四、五九七	四、八一〇	一、五七四
鮮魚介	二、四二二	二、〇〇六	一、四九三	一、五〇〇	二、二一七	七九一
バナナ	八、一三八	七、八九九	六、九八三	八、三三九	八、三七〇	一〇、九〇〇
切乾薯	一、八七六	一、〇四七	七八	七四九	四四一	六六〇
檜材及檜板	一、七八三	二、二一九	一、七二九	一、〇九一	一、二〇三	二、六三三
帽	三、九三八	二、五七四	二、二〇八	四、七八八	二、九八一	一、七八八
食鹽	九九八	一、〇六三	九五九	一、二一八	八三八	九〇四
鯉節	四、四四	四七〇	三二〇	五三七	八〇五	一、八一八
鳳梨罐詰	四、五三七	四、七七一	五、一五一	四、一五八	三、四八三	一、七五二
紅茶	九三六	六三三	二九五	一〇八	四六	四七

(口) 移入 (單位千圓)

綿織物及絹織物(各種)	一七、二五〇	一五、一〇六	一三、三五八	一三、五九六	一三、三九四	一九、八〇六
鐵(各種)	一一、五二七	一〇、四五八	八、〇一四	七、三四四	七、九〇二	六、二二四
清酒	三、〇七二	二、四九九	二、一九五	二、〇三二	二、一四	一、六五七
麥酒	一、八四一	一、八八四	一、九五六	四五二	二、三七九	二、三二一

錫	一、六三八	一、〇九〇	一、三〇一	七六五	一、〇〇二	二、七六五
セメント	二、三八五	二、三〇二	一、二四一	九七七	一、四二七	五二八
過燐酸肥料	二、二二〇	一、七三五	一、四〇〇	一、〇二八	一、三三五	一、六四九
硫酸	七、六四五	五、五四三	三、六一九	一、三七四	二、七七二	一、五二三
モニウム	二、八〇七	二、七三四	一、五〇五	一、二二三	九三五	一、〇一五
調合肥料	一、三六八	一、三六八	一、一九一	九一五	一、一〇〇	九六三
陶磁器	一、三三四	一、二四六	一、一〇〇	一、二五一	一、二九七	一、六一八
煎子	五、三九五	四、二四六	三、四〇八	二、六九二	二、七九六	二、二六四
杉材及杉板	一、八二五	一、九〇八	一、八一八	二、〇九一	二、七五一	二、一四
紙卷煙草	三、一九九	二、四九〇	二、二八一	一、七六〇	一、二二七	一、八〇七
ガソリン	四、五二六	三、九七〇	三、四七一	三、二三四	三、二五五	三、〇六六
黄麻	三、四一四	二、七二一	二、七二一	二、〇二二	二、三七四	三、四四〇
紙	二、五八八	二、二五二	二、二二一	一、三七三	一、三六八	一、三四四
小麦粉	二、〇二四	一、七八二	一、三三八	一、一〇七	一、一〇六	一、五〇九
毛織物	一、三三三	一、六〇五	一、七四一	一、二二五	一、四二四	九五五
肌衣(各種)	四、三一九	三、七六一	二、九三五	二、三八六	二、七三五	二、六二〇
鐵製	二、四二七	三、九二三	二、一七一	三、四四〇	一、一四七	一、〇三五
製帽原料						

菓子(各種)	一、六九〇	一、六六五	一、八二一	一、六七二	一、四一六	一、〇八一
味の素類	二、二五七	一、四八六	一、七三五	一、五八三	一、五七〇	四、五五

六 港別貿易

昭和九年に於ける本島の輸移出入貿易総額は五億二千百萬圓にして之を港別に觀るに基隆の二億七千萬圓第一位を占め總額の五割二分に當り、高雄の二億二千五百萬圓之に亞ぎ、四割三分を占め、安平の一千四百萬圓、淡水の二百六十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の五分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港と比較するに、基隆は神戸、大阪、横濱及大連に亞ぎ第五位を占め、高雄は釜山に亞ぎ第七位を保ち本島第二の貿易港たるの地位を示し、更に安平は平壤、武豊、淡水は大邱、那覇の各々中間に位す。

港名	昭和九年(千円)	總額	輸出	輸入
神戶	一、五八二、四四二	七九〇、六〇一	七九一、五四四	
大阪	一、〇九四、四七〇	五八六、一八〇	五三三、二九〇	
横濱	一、〇七五、五七	四九〇、二〇一	五三七、三三六	
大連	八〇三、八二〇	三三二、二二六	四七〇、六八四	
基隆	二、六九六、六六〇	一、三三、八三三	一、三六、八二七	
釜山	二、六九四、四三七	一、〇四、〇三三	一、六五、三九四	

港名	昭和九年(千円)	總額	輸出	輸入
高雄	三、五、四四一	一、六三、六七六		六二、七六五
川屋	二、〇、〇四一	一一五、五二五		八八、五二六
仁川	一、六〇、三三〇	六〇、二一九		一〇〇、二一一
小樽	二八、九五四	二四、七二四		四、二四〇
平壤	一、六、七四二	三、一六九		一三、五七二
安平	一、三、九二六	一、二五四		二、三七三
武豊	一、三、五七六	二二〇		一三、三五六
大邱	四、二八四	五二〇		三、七六四
淡水	二、六〇六	五四四		二、〇六二
那覇	九〇四	二四		八八〇

内地は帝國統計年鑑、其の他は各應統計書に依り臺灣及び朝鮮の各港は移出入をも含む。

一五 財 政

一 總督府財政

臺灣總督府特別會計は明治三十年度を以て開始されしも同三十八年度より全然國庫の補助を受けずして、獨立財政の實を擧ぐるに至れり。爾來國庫に對し内地に於て消費する砂糖の消費税全部を提供する等多大の貢獻を爲しつゝあり。今其の趨勢を窺ふに明治三十八年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしが大正元年度には六千萬圓に躍進、同八年度には一億圓を突破、爾來年と共に漸増し昭和四年度には實に一億五千萬圓の最高額を示せり。昭和五年度以降世界的不況、産業界萎靡沈滞及其の他諸多の國際的國內的因由に依り漸減し昭和六年度の一億一千六百萬圓を最低として最近漸増の一路を辿り昭和九年度には一億四千二百萬圓となれり。

次に累年歳入中其の主要部分を占むるは官業及官有財産收入にして、昭和九年度には六割を示し租税は一割四分に當れり。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓、同十一年度の九千六百萬圓に各々増加し、同十二年度以降は八千萬圓臺に一時減退せるも昭和元年度には再び九千萬圓臺を復活し、爾後大體に於て一億圓臺を維持し昭和九年度には一億一千二百萬圓に達せり。

更に是を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 總督府歳入出決算 (單位千圓)

年度	歳入			% (歳入)			歳出指數			
	總額	租稅	其他	租稅	其他	其他	租稅	其他	其他	
明治三八年	三,544	738.5	1,392.9	100	29.1	54.8	16.1	20,433	100	
大正一	6,029.6	1,349.4	2,473.0	177	33.4	41.0	36.6	47,189	231	
昭和五	5,766	943.1	3,356.2	166	58.4	24.7	43,687	209	131	
昭和十	11,066	2,239	4,683.1	314	19.0	39.2	41.8	94,500	462	450
昭和十五	13,778	2,922	7,064.5	395	26.6	53.6	29.8	91,941	450	497
昭和二十	18,677	1,856.0	7,004.0	555	13.4	50.5	36.1	101,533	497	534
昭和二十五	14,754	2,794	7,874.6	410	14.1	53.4	33.5	109,109	534	598
昭和三十	15,241	2,559	8,162	451	14.4	54.0	32.6	113,295	598	645
昭和三十五	19,768	1,904.4	7,498.6	551	14.7	57.8	27.5	109,971	598	645
昭和四十	22,973	1,806.5	7,024.8	656	15.6	60.6	23.8	99,060	485	586
昭和四十五	23,033	1,836.4	7,735	673	15.3	60.4	24.3	97,240	476	580
昭和五十	23,822	2,155	7,503.0	715	15.4	57.4	27.2	101,311	500	580
昭和五十五	19,348	1,934.8	7,514.6	557	13.7	60.1	26.2	112,177	549	589
昭和六十	10,236	1,809.9	8,394.8	473	15.1	69.9	15.0	110,136	588	588

昭和九年度迄は決算、同十年度は豫算なり。

(ロ) 内地其他との比較 (昭和九年度)

地域	歳入(圓)	歳出(圓)	人口一に付
臺灣	1,416,759.5	1,127,668.3	3.5
朝鮮	3,009,420.6	2,683,349.4	3.7
關東局	4,003,959.7	2,470,014.6	7.8
樺太	3,170,439.9	2,265,944.2	2.6
南洋群島	809,829.5	5,393,761	5.9
内地	2,246,982,000	2,163,004,000	3.7

關東局は同局統計書、内地は帝國統計年鑑、其他は拓務統計に依る。内地は現計(昭和十年七月三十一日)にして特別會計を含まず。

二 地方財政

大正九年地方官官制の根本的改正と同時に地方自治の基礎を確立せんが爲め州、廳地方

費、市及び街庄なる地方團體を新設し以て現在に至れり。従つて臺灣の地方財政も亦前記地方制度の發生と共に成立し今日に及び。臺灣の地方制度の概要を説明すれば州制は律令第三號、廳地方費令は律令第四號、市制は律令第五號、街庄制は律令第六號を以て何れも大正九年七月三十日公布、同年十月一日を期し實施され、自後多少の改正ありたるも昭和九年末現在に於ける地方團體は五州三廳、九市三十八街二百十七庄なり。

今地方財政の大正十年度と昭和九年度とを比較するに州費は歳入千六百八十萬圓より二千七百七十萬圓、歳出千三百二十萬圓より千七百七十萬圓と各三割を、廳地方費は歳入百八十六萬圓より三百四十七萬圓、歳出百三十六萬圓より二百四十八萬圓と各八割餘を、市費は歳入三百七萬圓より一千百萬圓、歳出二百五十一萬圓より九百十八萬圓と各二十六割を、街庄費は歳入九百八十八萬圓より千三百七萬圓、歳出八百四十八萬圓より千百五十四萬圓と各三割餘を各々増加せり。

(イ) 州 費 (單位千圓)

年度	歳入				歳出			
	總額	經常部	臨時部	再州掲税	指數	總額	經常部	臨時部
大正 一〇年度	一六八五	一三二七	三五三八	二五五五	一〇〇	一三二七	九〇一	四二二六
同 一一	一六四三	一二四九	三九九三	一〇二七八	九八	一三八三	九七四	三〇八九

(ロ) 廳地方費 (單位千圓)

昭和九年度迄は決算、同十年度は豫算なり。

年度	歳入				歳出			
	總額	經常部	臨時部	再州掲税	指數	總額	經常部	臨時部
昭和 一	一四、八六五	一一、六三四	三、二三一	九、五四九	八八	一三、九一四	九、七〇九	三、二〇五
同 二	一五、七六四	一二、六三三	三、一六一	一〇、四〇七	九四	一三、九一四	九、七〇九	三、二〇五
同 三	一六、四四九	一三、〇八四	三、三六五	一〇、七三一	九八	一三、八八〇	九、九〇五	二、九七五
同 四	一八、一〇八	一三、六〇九	四、四九九	一一、二四七	一〇八	一四、三〇三	一〇、一六三	四、一三九
同 五	一八、三五二	一三、六六五	四、六八六	一一、二三四	一〇九	一四、三六五	一〇、二六六	四、〇九九
同 六	一八、七七八	一三、五五二	五、二二六	一一、〇二二	一一三	一四、八八四	一〇、四五四	四、四三〇
同 七	一九、二四五	一三、三三〇	五、九一五	一一、〇七一	一二四	一四、九三九	一〇、五四九	四、三九〇
同 八	二二、五三二	一四、二四八	七、二八四	一二、六三七	一三八	一六、六〇三	一〇、九六九	五、六三四
同 九	二二、六七八	一四、九九六	六、六八一	一二、二五〇	一二九	一七、六八六	一一、五四七	六、一三九
同 一〇	二二、八六七	一三、八一七	五、〇五〇	一一、〇五九	一三三	一八、八六七	一二、四五八	六、四一〇

砂糖消費税	三〇二八	二六四三						七四、九六七
織物消費税	二	一八〇						三五、六九六
出港税	〇	九三						
其他の税	二五六一	二七七八						二六、九三
關稅			三	一〇				三〇、六五九
噸稅								一四、四三三
關稅								二、六五〇

本表は昭和九年度決算額にして關東局は同局統計書、其の他は拓務統計に依る。

一六 專 賣

本島の專賣事業は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒類の五を數へ其の種類に於て既に若干の特異性あり、且つ總督府歳入に於ける專賣收入は本島の有力なる財源として他に比儔なき重要性を有するものなり。

是が制度の沿革を略述すれば阿片は其の歴史最も古く本島人多年の習癖より明治二十九年三月製薬所に、食鹽は清朝時代官營なりしが領臺當初之を廢し民營に委せしも鹽田の荒廢、品質の低下、價格の變動甚しきに至り弊害矯正の爲め同三十二年五月鹽務所に、樟腦は其の事業と俱に領臺以前より既に古い歴史を有し樟樹濫伐防止、外人の所有せる商權回復等の目的を以て同三十二年八月樟腦局に於て各事業を開始せり。然るに同三十四年六月に至り是を專賣局に統一し煙草は内地より一年遅れて同三十八年施行、酒類は世界に於ても其の例極めて稀にして我が國に於ては本島のみ之を實施し專賣事業中最も新しく大正十一年七月の創始にかゝるものなり。以上本島の專賣制度は其の後時勢の進展に伴ひ多少の改正増補ありと雖も尙現在に及べり。

今、賣渡價額の累年を觀るに大正元年度には一千七百萬圓なりしが同六年度には二千萬圓臺を超え、更に同十一年度には三千五百萬圓に達し、同十二年度以後昭和五年度迄は四千萬圓から五千萬圓の間を上下し、昭和六年度には四千萬圓臺を割り三千九百五十萬圓となれるも昭和七年度には又四千二百萬圓に達せり。尙昭和九年度を觀るに阿片を除く以外は概ね增收の趨勢に在り。

(1) 專賣收入 (單位圓)

年度	賣渡總價額	指數	阿片烟膏	%	食鹽	%
大正一	一七〇九六、九二一	一〇〇	六〇二七、八三八	三五、二	七四七、九三三	四、四
同	一九五九七、九二一	一一五	六、五九〇、一五三	三三、六	九五二、九三五	四、九
同	二五、四四二、〇〇六	一四九	六、七七二、六一四	二六、六	一、七五三、六七七	六、九
同	四三、三三七、七〇九	二五三	四、七二六、五七六	一〇、九	二、一七二、八七六	五、〇
同	四二、九九一、九六一	二五二	四、三三五、七七四	一〇、二	二、二一五、九四七	五、一
同	四七、三四四、二三五	二七七	四、一〇三、一九一	八、七	二、〇九一、二七〇	四、四
同	四八、二八五、八一〇	二八二	三、七五〇、七九六	七、八	二、四〇〇、四七四	五、〇
同	四二、〇一六、九七七	二四六	四、二六六、一四〇	一〇、一	二、三三四、一二一	五、六
同	三九、五七七、七六六	二三三	三、八九七、六七三	九、九	二、四九九、六三〇	六、二
同	四二、二〇七、三三七	二四七	三、二四四、七二三	七、七	二、五三八、〇六四	六、〇
同	三五、五六四、四〇三	二〇八	二、七四〇、五六一	七、七	二、七七八、三八六	七、六
同	四〇、二八四、二五〇	二三六	二、三八四、一四九	五、九	二、七七一、四五二	六、九

大正

年度

樟腦及樟腦油

煙草

酒類

%

%

%

年度	賣渡總價額	指數	阿片烟膏	%	食鹽	%
大正一	六、七三八、五八四	三四、四	五、三一六、二四九	二七、一	一四、〇一五、四五九	三三、五
同	五、二五六、七二六	二〇、七	一、六五八、九九九	四、五	一四、七七七、四九七	三三、四
同	八、二二八、二六三	一九、一	一四、〇〇四、五三六	三三、五	一五、六七八、七七七	三三、一
同	六、六二七、二一八	一五、四	一四、九九五、六二五	三三、五	一五、二六九、六六八	三三、一
同	九、五九八、六二八	二〇、三	一五、八七二、三五九	三三、七	一三、七三三、八三二	三三、七
同	一〇、五八八、九五六	二二、九	一六、二七五、九一六	三三、七	一二、五八二、二九三	三三、八
同	五、九八一、五七四	一四、二	一五、七一一、三一〇	三三、六	一三、五二三、四五七	三三、二
同	六、一五二、二二七	一五、五	一四、四六五、九六三	三三、〇	一四、八七八、一五六	三三、一
同	八、一二二、三三五	一九、二	一四、七八八、七五八	三三、〇	一八、五七六、五七九	四一、二
同	? ?	? ?	一五、二四七、二九九	四二、一		
同	? ?	? ?	一六、五五二、〇七〇	四二、一		

樟腦及樟腦油には副産物を含む。

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一七 金融及商業

一 幣 制

領臺當時本島の幣制は大體に於て同時代清國に於けるが如き混沌狀態に在り確乎たる貨幣制度なるもの未だ存在せず、従つて日常の諸取引に使用せらるゝ通貨の如きも主として銀貨にして其の種類實に百數十種の錯雜を極め計算單位は全島を通じて一率に「元」と稱せられてゐたが其の實價に至つては各地不同なるを常とせり。

於茲政府は是等紊亂せる幣制の整理を策し明治三十年臺灣銀行法を制定し同法第八條に依り同行は金額五圓以上の無記名式一覽拂手形發行の特權を付與され、更に同三十二年法律三十四號を以て銀行券を發行し得る事に改められたり。

是より曩、明治三十年内地に於て金本位制の採用せらるゝや本島も是に追隨するの必要一應ありと雖も當時島民の多年銀貨流通に馴れたると愛銀觀念の熾烈なる事及び對岸支那との貿易關係に鑑み暫く内地同様の金本位貨幣法を施行せず過渡的便法として銀本位制を採用せり。

其の後時勢の進展と經濟界統制との爲め明治三十七年律令第八號を以て臺灣銀行は更に金兌換券の發行も認められ一時金券及び銀券が同時に流通を見たり。然るに同四十年に至り對岸より銀貨の輸入激増し再び幣制を紊すの虞を生じたりしかば翌四十一年是に對する方策として從來發行せる銀券使用を禁じ其の交換期限を四十二年末日限りと爲し是を整理

處分し明治四十四年には内地同様貨幣法を施行して金本位制に統一され多年の懸案此處に漸く解決せられて今日に及べり。

二 銀行

本島は領臺當時銀行と稱すべきものは未だ存在せざりしも、政府の金融政策に對する努力と一般産業の發展と各種商業の殷盛と相俟つて現下の盛況を呈するに至れり。昭和九年末現在本島に本店を有する銀行數五にして支店及出張所數（日本勸業、三和兩銀行を含む）は島内六十六、内地四、外國十六、資本金二千八百三十萬圓（拂込金二千一百萬圓）、積立金三百九十萬圓、純益金四百三十萬圓、預金二億四百萬圓、貸出金三億八千三百萬圓なり。

(イ) 銀行總表 (單位千圓)

總數	支店 出張所	公稱 資本金	積立金	純益金	年末現在	
					預金	貸出金
臺灣銀行	三	一五、〇〇〇	三、一〇四	一、四四三	二〇、六四九	三六、二九八
華南銀行	三	二五、〇〇〇	—	四	一一、六一〇	二六、六〇三
總數	六	二八、三〇〇	三、九一三	四、二六九	三二、二五九	六二、九〇一

臺灣商工銀行	二	—	—	—	—	—
彰化銀行	一四	四、八〇〇	六、九	三、〇	三、六九六	一三、八〇〇
臺灣貯蓄銀行	三	一、〇〇〇	六、八	四、八	一〇、三〇六	二、四四八
三和銀行支店	三	—	—	二、三	一八、七八一	一〇、七四三
日本勸業銀行支店	二	—	—	一、九九八	二、三三三	八三、八七六

(ロ) 朝鮮其他との比較 (單位千圓)

	臺灣	朝鮮	樺太	關東局
本、支店及出張所數	九二	一九四	一四	八〇
公稱資本金	二八、三〇〇	一〇〇、六七五	二、〇〇〇	?
拂込資本金	二〇、六八〇	六、一七三	一、四七五	一一、九三一
積立金	三、九一三	三、三七一	二〇三	二、二五三
預立金	二〇三、六四九	三、四六、三七	三、三三〇	二、九三、三四六
貸出金	三、八二、九元	六、九一、七元	一、八、六三五	三、一七、四〇三
純益金	四、二六九	六、四三六	?	一、三三〇

本表は昭和九年末現在にして關東局は同局統計書、其他は拓務統計に依る。

三 其の他の金融機關

昭和九年末現在(金額千圓)

調査組合數	組合員數	出資額	準備金及諸積立金	貯金	貸付金
四三二	三五、五三四	一七、二三三	二二、七六六	六五、二七三	六七、四三五
產業組合	營業所數	出資金	給付契約高	掛金契約高	
無盡業	三	三八八	二八、三四四	二九、八七三	
昭和九年度(金額千圓)					
公設質舖	舖數	貸出	貸出回收高		
	一五	件數 二五、七三四	金額 二六、〇〇〇	件數 二五、〇五八	金額 二、二八七
手形交換所	所數	交換枚數	交換高(圓)		
	五	五八、八四七一	三九、二〇三、一九九		

四 物 價

物價指數は沿革的には貨幣價值の變動測定を第一義的目的とし作成利用せられ來りしが

現今に於ては社會政策及物價政策等の主要なる資料として各方面に利用せらるゝと共に、國民生活の向上伸展は物價指數に對する社會的要望を益々切實ならしめつゝあり。

本邦に於ける物價に關しては商工省の調査に係るものと日本銀行調査に依るものを主たるものとす。更に基數を何年に採るか依つても亦多少の相違あるを免れない。然し現今最も廣汎且つ普遍的に採用されるものは日本銀行調査の明治三十三年を最古とし、次に大正三年歐洲大戰々前物價を、更に最近に於ては昭和五年一月濱口内閣金解禁の前年平均を基數とせるものゝ三種あり。

今本島に於ける物價指數の趨勢を知るが爲めに昭和四年平均基準を百とし本島の代表的都市臺北に於ける主要生活必需品の卸賣及び小賣物價指數を示せば次の如し。

(イ) 卸賣物價指數

昭和	四年	五年	六年	七年	八年	同	同
長梗	100.0	七六七	五三五	八一三	八一五	同	同
蓬菜	100.0	八五五	五九七	七九二	七三二	同	同
醬油	100.0	九四七	八三三	八三四	八一〇	同	同
味噌	100.0	九一三	五九四	六八五	六七五	同	同
白糖	100.0	八七七	八三〇	九〇五	九三六	同	同
木炭	100.0	八七四	七七四	五九九	五四七	同	同
薪	100.0	九八三	七六〇	五七七	五三三	同	同
石炭	100.0	八七六	七一九	六二八	八五一	同	同

同	同	八八二	八四三	七四八	六八三	九四一	五二八	五九九	一〇三三
一	〇九	二六四	二四五	七九九	八八五	九六〇	五四二	六三三	一〇六〇

(口) 小賣物價指數

同	同	同	同	同	同	同	同	同	昭
一	〇九	八七	六五	四	和	年			
九六五	七六六	六九四	七〇一	八九〇	一〇〇〇	蓬萊白米	一〇〇〇	內地白米	一〇〇〇
一〇五〇	八六九	八〇三	八〇〇	八〇四	一〇〇〇	豚肉	一〇〇〇	醬油	一〇〇〇
八四〇	七九三	七六八	七五五	九八六	一〇〇〇	味噌	一〇〇〇	白糖	一〇〇〇
七三四	七三三	七六三	八七七	一〇〇〇	一〇〇〇	木炭	一〇〇〇	薪	一〇〇〇
一〇二七	八六二	八六二	八四七	九三一	九四八				
九四四	九三四	九六七	八七〇	八七〇	九四四				
六七一	六四一	六三四	六八三	八〇二	八四七				
七七七	七四〇	六六六	七〇三	八四七	九五八				

五 會 社

本島に於ける會社は昭和九年末現在、社數千六十二、拂込資本金(出資金を含む)三億一

千六百萬圓にして内、株式會社は四百四十八(四割二分)、拂込資本金二億九千百萬圓(九割二分)、合資會社は五百三十二(五割)、出資金千七百萬圓(五分)、合名會社は八十二(八分)、出資金八百萬圓(三分)なり。

次に營業別社數を觀れば各會社を通じ商業最も多數を占め株式會社は百九十で其の總數の四割二分に當り、以下合資會社は二百九十九(五割六分)、合名會社は三十九(四割八分)なり。更に拂込資本金又は出資金の最も多きは株式會社に在りては工業の一億九千萬圓で其の總數の六割七分を占め、以下合資會社の商業六百十萬圓(三割六分)、合名會社の商業三百萬圓(二割五分)なり。

尙本島の會社を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 會社總表 (單位千圓)

總數	株式會社	合資會社	合名會社
一〇六一	四〇八	五三三	八二
資本金	四六九、四三三	一六八、八五四	八二、四九九
拂込資本金	三三、八三三	二九〇、七三〇	八、二四九
農林業	七四	三三	六
會社數	三三、四五六	二、九三〇	五、〇五九
資本金	一三、八四九	五、八六〇	五、〇五九
拂込資本金			

業種	總數		臺灣	朝鮮	樺太	南洋群島	内地
	會社數	資本金					
礦業	會社數	資本金	1,021	2,103	395	3	78,191
工業	會社數	資本金	4,442	7,385	2,144	29,676	32,267
	會社數	資本金	3,583	4,157	1,858	18,578	25,751
商業	會社數	資本金	74	217	9	3	1,833
	會社數	資本金	1,345	4,405	245	4,000	17,988
水産業	會社數	資本金	1,384	3,678	25	3,333	135,951
	會社數	資本金	16	26	5	4	338
農林業	會社數	資本金	5,216	3,697	?	84	142,754
	會社數	資本金	2,679	2,601	199	84	120,288
總數	會社數	資本金	26,490	53,585	200	11	1,066,997
	會社數	資本金	41,686	53,585	3	11	837,231

本表資本金とあるも株式會社以外は出資金なり。

業種	總數		臺灣	朝鮮	樺太	南洋群島	内地
	會社數	資本金					
礦業	會社數	資本金	1,021	2,103	395	3	78,191
工業	會社數	資本金	4,442	7,385	2,144	29,676	32,267
	會社數	資本金	3,583	4,157	1,858	18,578	25,751
商業	會社數	資本金	74	217	9	3	1,833
	會社數	資本金	1,345	4,405	245	4,000	17,988
水産業	會社數	資本金	1,384	3,678	25	3,333	135,951
	會社數	資本金	16	26	5	4	338
農林業	會社數	資本金	5,216	3,697	?	84	142,754
	會社數	資本金	2,679	2,601	199	84	120,288
總數	會社數	資本金	26,490	53,585	200	11	1,066,997
	會社數	資本金	41,686	53,585	3	11	837,231

(口)

營業別内地其他との比較

(單位千圓)

銀行及 金融業	運輸業	その他	關東局は同局統計書、 本表には合資及合名兩會社の事實を含む。		關東局は同局統計書、 其の他は拓務統計に依る昭和九年末現在なり。
			會社數	資本金	
會社數	會社數	會社數	資本金	資本金	資本金
拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金
六五	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七
四五、〇一五	一七、四〇七	九、三三八	一五九、四三三	八四、四六九	一四、九二一
二七、〇七〇	一〇五、六九四	五三、九九八	七三、八二五	三、二四	二、〇〇〇
一四九	二二三	三、八〇	六、二四	二、〇〇〇	一、七七八、七〇四
二六、五三五	六九、四〇七	一四、九二一	三、二四	二、〇〇〇	二、七九五、一五九
七、四六〇	七、四六〇	六八	二、〇〇〇	一、五七六、九一九	二、八四三
三	三	三	一、五七六、九一九	一、五七六、九一九	五、七三九
二、八四三	二、七九五、一五九	一、七七八、七〇四	二、三〇一、二四〇	一、五七六、九一九	二、七九五、一五九

(ハ) 組織別内地其他との比較 (單位千圓)

總數	臺灣	朝鮮	樺太	南洋群島	内地
會社數	1,011	11,101	35	35	76,198
公稱資本金	4,694,422	73,825	6,244	29,676	22,269,788
又はは出資額	3,583,333	43,257	4,751	18,568	15,775,261
拂込資本金	4,694,422	73,825	6,244	29,676	22,269,788
又はは出資額	3,583,333	43,257	4,751	18,568	15,775,261

株式會社	株式會社	株式會社	株式會社	株式會社	株式會社	本表は拓務統計に依る昭和九年末現在にして朝鮮の株式會社には株式合資會社を、内地の株式會社には株式合資會社及相互會社を含む。	
						株式會社	株式會社
會社數	會社數	會社數	會社數	會社數	會社數	株式會社	株式會社
公稱資本金	公稱資本金	公稱資本金	公稱資本金	公稱資本金	公稱資本金	株式會社	株式會社
拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	拂込資本金	株式會社	株式會社
四四八	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
四四、三三九	六五九、九九六	五八、三七一	二八、〇七五	一八、七九九、二四八	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
二九〇、七三〇	三七九、七五八	三六、九七八	一六、九六七	一三、四七、四三五	二、〇二四	二、〇二四	二、〇二四
五三二	一、〇九七	二二七	一五	四一、八三三	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
一六、八五四	三三、七九三	三、四八〇	一、五二六	一、〇九四、一八一	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
一六、八五四	三二、六三三	三、四八〇	一、五二六	一、〇九四、一八一	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
八二	一八一	四四	五	一四、三五七	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
八、二四九	二二、〇二六	一一、二九三	八五	一、三三三、五四九	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
八、二四九	二〇、二二六	一一、二九三	八五	一、三三三、五四九	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四
八、二四九	二〇、二二六	一一、二九三	八五	一、三三三、五四九	一、〇二四	一、〇二四	一、〇二四

一八 學 事

一 教育概覽

明治二十八年六月臺灣總督府の開應せらるゝや、銳意教育に意を注ぎ異民族の教育に對しての多大なる研究と犠牲とを投與し、諸種の施設をなしたりしが大正八年一月勅令を以て臺灣教育令發布せられ本島人教育の基礎始めて整備せり。然れども此れは内地の學制とは全く別系統にして、主として本島に於ける當時の特殊事情に鑑みて制定せられたるものなりし爲め時勢の進運に伴ひ之が改善の必要を生じ、同十一年二月發布の臺灣教育令に依り初等教育を除くの外は悉く内臺人共學の制を採るに至れり。

昭和九年度に於ては初等教育機關たる小、公學校の七百四十二校（外に分教場小學校一、公學校百六十一）、兒童三十七萬三千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十四校、生徒一萬一千七百人、師範學校の四校、生徒千四百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林、農業、工業、商業學校の四十一校、生徒五千二百人、專門教育機關たる醫學專門學校、帝國大學附屬農林專門部、高等商業學校、高等工業學校の四校、生徒九百四十人、帝國大學一校、學生百二十八人、私立各種學校十九校、生徒三千七百人、書房百十、生徒三千五百人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、教員一に對する小學校兒童數は南洋群島の五十三人最も多く、朝鮮の三十六人最も少く、本島は四十一人を以て關東州及鐵道附屬

地の上に位し第四位を占む。又臺灣の公學校を外地の本地人初等教育機關（朝鮮の普通學校、關東州及鐵道附屬地、南洋群島の公學校）兒童の教員一に對する割合は、朝鮮の五十九人最も多く、本島は五十六人を以て之に亞ぎ、關東州及鐵道附屬地の四十六人、南洋群島三十六人の順位に在り。
 尙本島の中等教育機關以上を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 教育機關 (昭和九年度)

學校	教員	學生、生徒 又は兒童	教員一人に付學 生、生徒(兒童)
帝國大學	一	三八	一六
醫學專門學校	一	三五	一〇二
帝國大學附屬 農林專門部	一	七三	五七
高等商業學校	一	二四	九八
高等工業學校	一	三二	七一

高等學校	一	四〇	一四五
師範學校	四	一〇一	一三六
中學校	二〇	二八四	二五四
高等女學校	三	二四一	二三五
農林學校	二	一七一	一九六
農業學校	一	四五	一四四
工業學校	一	二六	一一一
商業學校	二	六六	二二九
實業補習學校	三	五〇	一九九
小學校	一三三	四八	四一三
公學校	一六九	二〇六	五五八
盲啞學校	二	五	一五二

私立學校	150	x	150	3,680	245
書房	110		147	3,520	240
幼稚園	7	x	144	7,457	518

學校(△は分教場)は年度末現在、教員、學生、生徒(兒童)は三月一日現在、教員中×は兼務者にして本表比例には之を除外せり。

(口) 内地其の他との比較 (昭和九年度)

初等教育

小學校	133	968	40,033	3009	413
臺灣校	485	2,285	81,523	1,681	357
朝鮮校	336	1,287	49,282	2,281	415
關東州及鐵道附屬地	60	1,267	42,655	7,099	366
南洋群島	7	75	3,936	2315	525
均兒童					
教員一人に付兒童					

中學校	20	224	5,432		
臺灣校	37	886	20,578		
朝鮮校	3	86	1,901		
樺太	10	295	5,843		
關東州及鐵道附屬地	554	13,357	37,247		
内地					
女學校					
昭和中學堂及高等公學校を含む					
昭和八年度					

中等教育

内地	25,702	245,733	11,035,278	4294	449
臺灣校	609	5,966	332,966	5667	558
朝鮮校	2,321	10,799	640,140	2,882	593
關東州及鐵道附屬地	238	914	42,427	3,074	464
南洋群島	24	83	2,976	1,240	359
關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依り、小學校の内地は昭和八年度末現在にして分教場及び兼務教員は之を除外せり。					
學校					
教員					
生徒					

朝鮮 一 五〇九 六三二
 關東州及鐵道附屬地 二 二〇六 一〇四六
 内地 七 六八五 七〇三三 昭和七年度

内地は帝國統計年鑑、朝鮮は拓務統計、關東州及鐵道附屬地は關東局統計書に依り、兼務教員は之を除外せり。

二 社會教育

國民資質の向上、國民精神の涵養、個人情操の陶冶並に科學的智能の啓培等何れも學校教育及び社會教育に負ふ處最も多し。學校教育の起源と歴史は極めて古く所謂社會教育の沿革は比較的新しと雖も前者には一定期間の修業年限あれども後者には原則として一定の年限ある事なく此の意味に於て社會教育の範圍と使命は廣汎且つ重大なりと謂ふを得べし。本島に於ける社會教育は内地と略其の施設及び目的を同じくし從來主として國語の普及發達に努力せる點に於て多少其の趣を異にする處あり。今本島に於ける社會教育の一斑を示せば次の如し。

昭和十年四月末現在

國語講習所	所數	生徒	修了者	經費(圓)
	一六二九	一〇五、七七〇	六三、〇三三	七九〇、五六八

簡易國語講習所	所數	生徒	修了者	經費(圓)
青年輔導教育施設	一三〇	三二、三七八	三、二六八	五七、二二四

青年團	總數	男子	女子
團員數	九七	六二	二九六
經費(圓)	三、四二二	二五、一六三	九〇、七九
	二四、三六五	九二、六〇九	二、七七六

家長會及主婦會	總數	家長會	主婦會
會員數	六二	四三七	一七四
經費(圓)	二四、七六六	一七二、三八七	七三、三七九
	二〇、八三三	九、五八五	一一、二四八
少年團	團員數	團員	經費(圓)
	八	三、九四四	一六、〇二八
青年訓練所	所數	生徒	經費(圓)
	八	一、二二三	三、七七五

圖書館	館數	藏書冊數	貸付冊數	閱覽人員
	七	三二五、二〇〇	一九五、三三五	一、三八四、七五九

昭和九年度

博物館 館數 四

陳列點數 二七、三四

昭和九年度 觀覽人員 四九五、七二

社會教育獎勵團體

- 社團法人臺灣教育會
- 恩賜財團臺灣教化事業獎勵會
- 恩賜財團臺灣濟美會
- 財團法人伊澤財團
- 財團法人臺灣體育協會
- 臺灣教化團體聯合會

(臺北州教化聯合會、新竹州同光會、臺中州教化聯盟、臺南州共榮會、高雄州教化聯合會等)

三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人、大正九年の九萬九千六十五人に各増加し昭和五年に於ては實に三十六萬五千四百二十七人に飛躍せるも尙本島人千に對し僅かに八十四人七分を算するに過ぎず。

年	總數	男	女	指數	平均	
					男	女
明治三八年	一一、二七〇	一〇、八〇一	四六九	一〇〇	三八	六九
大正四年	五、三三七	五〇、二四三	四、一九四	四八三	一六三	二九二
同九年	九、〇三五	八七、八九七	一一、二六八	八七九	二六六	四九三
昭和五年	三六、四三七	二九四、六七七	七〇、七五〇	三、三四三	八四七	一三四四

男女別本島人千に付

本表は大正四年迄は戶口調査、同九年以後は國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一九 衛生

一 醫療機關

本島には醫療機關として昭和九年末現在に於て官立十四、公立二十、私立百八十二、計二百十六の醫院、一千五百四十九名の醫師(他に齒科醫師二百八十九名)、二百五十六名の醫生(明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者)、百五十三名の藥劑師、千六百三十一名の産婆を有し、尙製藥者二十名、藥種商二千七百二十三名あり。

次に醫師及醫生一人に付人口を觀るに全島平均は二千八百七十八人に當り、其の割合の最も多きは澎湖廳の三千七百十四人にして、最も少きは花蓮港廳の二千二百二十人なり。尙本島の醫療機關を内地其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 地方別醫療機關

總
臺北
州數

醫院		醫師及醫生		產婆	藥劑師	醫師及醫生一人に付人口
官立	公立	總數	醫師	醫生		
私立	總數	醫師	醫生			
五	二四	一八五	一五四	二五	一六三	二八七
六	三〇	四二九	三九四	三五	一三三	二四〇六
四	一三				六〇	

總數	臺北州	新竹州	臺南州	高雄州	臺東廳	花蓮廳	澎湖廳
水道數	六	八	三	七	九	六	一
專用栓戶數	六四、二四二	三二、二七三	二八、五〇〇	八、二八一	二二、三〇五	五、九八九	二、〇七六
共用栓戶數	三三、七五六	一五、三三七	二、四六一	三、三六七	四、四九六	五、四九九	二、一九八
總數	三三、九三二	二二、八八三	一、一〇四	六、三三六	三、八六三	七、三九四	六八八
計量供給	一八八、七三三	二〇、六四二	一、〇六六	二、三三二	二、二六九	一、七八七	五七六
放任供給	一四、〇六八	二、二四一	三、八	三、九六三	一、五九四	五、六〇八	一三三

本島に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數は昭和九年末には七十九箇所、其の給水専用栓戶數六萬四千二百四十一戶、共用栓戶數三萬五千七百五十六戶にして消費水量は不明のものを除き、計量供給千八百九十萬立方米、放任供給千四百萬立方米なり。

年末現在
年中消費水量(千立方米)

二 水 道

本表は拓務統計に依り、内地は昭和八年末の事實なり。

醫師一人に付人口	製藥者	藥種	產藥商	藥劑師	齒科醫師	醫師	醫院
二、八六六	三三	二、七三三	一、六三一	一、一五二	二、八九	一、八〇五	三二六
三、一〇五	五〇	一、〇六五	一、七六六	三、四九	六、九六	六、八〇四	一、三六
一、五五〇	四	七六	二、四九	四二	五八	二、〇三	二四
一、九二九	一八	四八	二、〇	四	四七	四〇	一〇
一、二七一	三、八三三	二八、一五六	五、五九〇	二、八〇二	一、七九八	五、八八四	二、五五五

(口) 内地其他との比較 (昭和九年末)

臺灣	朝鮮	樺太	南洋群島	内地
一一	一	二	二	一
一	一	一	一	一
二	二	二	二	二
三	三	三	三	三
四	四	四	四	四
五	五	五	五	五
六	六	六	六	六
七	七	七	七	七
八	八	八	八	八
九	九	九	九	九
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一一	一一	一一	一一	一一
一二	一二	一二	一二	一二
一三	一三	一三	一三	一三
一四	一四	一四	一四	一四
一五	一五	一五	一五	一五
一六	一六	一六	一六	一六
一七	一七	一七	一七	一七
一八	一八	一八	一八	一八
一九	一九	一九	一九	一九
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二一	二一	二一	二一	二一
二二	二二	二二	二二	二二
二三	二三	二三	二三	二三
二四	二四	二四	二四	二四
二五	二五	二五	二五	二五
二六	二六	二六	二六	二六
二七	二七	二七	二七	二七
二八	二八	二八	二八	二八
二九	二九	二九	二九	二九
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三一	三一	三一	三一	三一
三二	三二	三二	三二	三二
三三	三三	三三	三三	三三
三四	三四	三四	三四	三四
三五	三五	三五	三五	三五
三六	三六	三六	三六	三六
三七	三七	三七	三七	三七
三八	三八	三八	三八	三八
三九	三九	三九	三九	三九
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇
四一	四一	四一	四一	四一
四二	四二	四二	四二	四二
四三	四三	四三	四三	四三
四四	四四	四四	四四	四四
四五	四五	四五	四五	四五
四六	四六	四六	四六	四六
四七	四七	四七	四七	四七
四八	四八	四八	四八	四八
四九	四九	四九	四九	四九
五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

年中消費水量の臺東廳は臺東水道、花蓮港廳は花蓮港水道のみの事實なり。

三 地方病及傳染病

本島は一般に酷熱多雨にして不健康地の如く解せらるゝも近年衛生諸施設の完備と衛生思想の普及向上と兩々相俟ち最近著しく面目を一新し、明治時代及び大正初年間暴威を逞ましうせしペストの如きも大正七年以來全く其の跡を絶ち發生を見ざるに至れり。

次に本島の代表的地方病マラリアは領臺以來十數年間其の流行猖獗を極め死亡者多數に上りしが、大正二年本病防遏の根本的對策を樹立し、マラリア防遏規則を制定し、本病の濃厚地に對し防遏地域を指定し、原蟲保有者には強制服藥を命じ、一面地物の整理を講じ銳意防遏に意を注ぎたる結果大正四年一萬三千三百五十人、即ち人口萬に付約四十人の多數死亡者を算せしが、同年以後は漸減し昭和九年に於ては死亡者三千百人、人口萬に付六人に激減せり。

更に法定傳染病に就きて觀るに死亡者の最も多きは腸チフスにして改隸以來遞増の傾向ありて今尙増加の趨勢を辿りつゝあり。本病の豫防に對しては其の計畫を一新し先づ檢疫機關の擴張と共に豫防施設の充實を圖り一面民衆の本病に對する關心と理解との啓發に努め其の殲滅を期しつゝあり。

尙本島に於ける傳染病患者及死亡者の累年比較と昭和九年病類別傳染病患者及死亡者を内地其の他と比較すれば別記の如し。

明治 三十九年
大正 一五年
昭和 一〇年
同 一
同 二
同 三
同 四
同 五
同 六
同 七
同 八
同 九

(イ) 腸チフス及マラリア死亡者

年	死亡者		指數		人口萬に付死亡	
	腸チフス	マラリア	腸チフス	マラリア	腸チフス	マラリア
明治三十九年	六	一〇、五六二	一〇〇	一〇〇	〇・二二	三四・二九
大正一五年	一八四	六、九〇九	二七九	一〇七	〇・五五	二〇・六〇
同 一	二七九	一一、三四六	四三三	一〇七	〇・七九	三三・三三
同 二	一八四	七、〇七〇	二七九	一〇七	〇・九〇	一八・八五
同 三	一五〇	五、七五八	二二七	一〇七	〇・三六	一三・八〇
同 四	三三二	五、〇八三	三三三	一〇七	〇・五二	一一・九六
同 五	二八三	四、三四六	四三三	一〇七	〇・六五	九・九六
同 六	二九二	四、〇二五	四三三	一〇七	〇・六五	九・〇三
同 七	三三三	二、八四四	四三三	一〇七	〇・七〇	六・二九
同 八	二四三	二、九九一	三六八	一〇七	〇・五三	六・三四
同 九	二〇六	三、三三五	三三三	一〇七	〇・四三	六・八九
同 一〇	二四八	三、〇二二	三七六	一〇七	〇・五〇	六・〇八
同 一一	二六四	三、一〇七	四〇〇	一〇七	〇・五〇	六・〇〇

パラチフス	腸チフス	痘瘡	赤痢	總數	臺灣	朝鮮	樺太	南洋群島	内地
患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者
死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡
率	率	率	率	率	率	率	率	率	率
二二四	二四〇	一一五	一六二	〇六	二二六	〇六	三三	〇九	二〇
二二	三〇一	一一五	二六	二六	二六	二六	三三	二四	二〇
四七	一一五九	一一五	二六	二六	二六	二六	三三	二四	二〇
四七〇	五、六二四	三〇〇	一九六	〇六	一七九	〇六	三三	二四	二〇
三三	八三三	一三五	五二七	三三	二七九	三三	三三	二四	二〇
四七〇	一四六	四五〇	五二七	三三	二七九	三三	三三	二四	二〇
一三六	一五五	一三六	一六四	三三	三三	三三	三三	二四	二〇
三三	七五	一三六	九	三三	三三	三三	三三	二四	二〇
一三三	六三	一三三	三六	〇九	一四三	〇九	一四三	二四	二〇
二	二	一	七	〇九	三三	〇九	一四三	二四	二〇
一五	三三	一	三	〇九	三三	〇九	一四三	二四	二〇
一八二	四、六九五	一一一	三四四	二〇	三三	〇九	一四三	二四	二〇
四、四八一	七、七三三	三三	二四七	二〇	三三	〇九	一四三	二四	二〇
三七	一八二	三三	二四七	二〇	三三	〇九	一四三	二四	二〇
七五	一八二	三三	二四七	二〇	三三	〇九	一四三	二四	二〇

患者には前年よりの越患者を含む。

昭和	同	同	同	同	同	同	同	同	同
患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者
死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡	死亡
率	率	率	率	率	率	率	率	率	率
一、五五二	一、九五五	二、三三三	二、二六一	二、六四七	一、九六四	二、二二〇	二、二七八	三、〇九九	三、〇九九
三七	四五	五三	五〇	五七	四一	四五	四三	六〇	六〇
三〇七	三六七	四〇四	四六八	四四二	四〇〇	三九二	四〇七	六六八	六六八
〇七	〇八	〇九	一〇	〇九	〇八	〇八	〇八	一三	一三
一九八	一八八	一七三	二〇七	一六七	二〇四	一七七	一八七	二二六	二二六

(ハ) 内地其の他との比較 (昭和九年)

(ロ) 傳染病患者及死亡者累年比較

同同同

一〇九八

二七
二五
二四

一五
一六
一六

五五六

二六七

二〇 水利

本島に於ける昭和九年度末現在の埤圳数は六千九百五十五にして内、水利組合百七、公共埤圳二、認定外埤圳六千八百四十六なり。
次に灌溉排水面積は四十七萬六千甲にして内、其の五割強は水利組合の灌溉に屬す。

總數	埤圳數	灌溉排水面積	% (灌溉排水面積)
水利組合	六九五	四七、五三二	100
公共埤圳組合	二〇七	二四、〇三二	五〇.五
認定外埤圳	六八四	一三八、八七九	二九.二
		九六、三八一	二〇.三

二二 鐵道

一 官設鐵道

領臺前本島に於ける鐵道は基隆新竹間九十九軒餘（清國時代臺灣巡撫劉銘傳の獻策に基き敷設）ありしも施設不完全、線路の傾斜屈曲甚しく殆ど使用に堪へざる状態なれば領臺の初め是を修理して一時軍用に供したりしが運輸機關としての機能を充分發揮する能はず、明治三十一年縦貫鐵道建設の議定まり第十三回帝國議會の協賛を経て豫算約三千萬圓十年繼續事業として計畫を樹て南北兩端より工事に著手し同四十一年四月全線の開通を見るに至れり。

其の後本島の産業は逐年異常の進歩發達を遂げ殊に歐洲大戰以來此の傾向は一層急激顯著となり従來の輸送力に不足を生ずるに至り大正八年經費千餘萬圓を以て竹南、大肚間海岸線建設に著手同十一年開通後更に貨客輸送上の便宜を圖る爲め同線を彰化迄延長し現在に及べり。

前記縦貫線の外、淡水線は明治三十四年、潮州線は同四十年、臺東線は大正六年、宜蘭線は同九年に各一部或は全通し其の後若干の延長を爲し又は平溪線、集集線の如く會社經營を買収し今日の盛況を呈するに至れり。

今昭和九年度に於ける本島の官設鐵道を觀るに營業線路延長九百九十九軒、乗客千八百三十萬人、運輸收入二千百六十萬圓にして營業線路延長を内地其の他と比較すれば面積千

方秆に付營業線の秆數は内地の四三・二秆最も多く、本島の二七・八秆是に亞ぎ朝鮮の一三・九秆は本島の二分の一に當り、樺太の九・五秆最も少し。

(イ) 官設鐵道

總數	本線							停車場	營業線	旅客	運輸收入
	總數	縱貫線	宜蘭線	平溪線	淡水線	臺中線	集集線				
三三三	二一五	八四	三三	四三	二七	二六	二〇	九	九	九	九
九九九〇	七〇七	四〇五九	九八八	二二九	二二〇	九二四	四七〇	一七三〇	三七四	三七四	三七四
一八三四、六三三	一七、一九〇、〇二四	一〇、八四九、六二四	一、四八八、九四九	九一、七六四	一、五〇三、三〇六	二、四二四、七六五	一、四三八、五二〇	九四五、三三三	一六三、八四四	三六、四八二	三六、四八二
二、六二七、二五三	二〇、七六〇、五六三	一五、〇八四、七六五	一、二七九、九三七	二二八、六七五	五六三、六〇八	二、〇八七、二五〇	一、一五二、九三一	一七、五一八	一、二五、五四五	六六、九〇九	六六、九〇九

(ロ) 内地其の他との比較 (昭和九年度)

停車場	營業線(秆)	面積千方秆に付營業線(秆)	運量(千吨)	旅客(千人)	手小荷物(千疋)	運輸收入(千圓)	内地其他との比較			
							臺灣	朝鮮	樺太	
三三三	九九九	二七八	五七九六	一八、三三五	二、四九七	三、五七六	四三九	三、〇七七	六五	三、二三三
二一五	七〇七	二七八	五七九六	二五、六一五	七、六八二	一、五二九	三、〇七七	九五	一六、五三五	一、六、五三五
八四	四〇五九	二七八	五七九六	一、五二九	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	九一三、五六五	四三、二
三三	九八八	二七八	五七九六	二、四九七	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	七、四七八	六三、三六三、餘
四三	二二九	二七八	五七九六	五〇、三〇八	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	四九、七七七	二五、〇二七
二七	二二〇	二七八	五七九六	五〇、三〇八	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	二二八、六八一	一九、〇七〇
二六	九二四	二七八	五七九六	五〇、三〇八	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	二二八、六八一	一九、〇七〇
二〇	四七〇	二七八	五七九六	五〇、三〇八	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	二二八、六八一	一九、〇七〇
九	一七三〇	二七八	五七九六	五〇、三〇八	七、六八二	七、六八二	三、〇七七	九五	二二八、六八一	一九、〇七〇

本表は拓務統計に依る。

二 私設鐵道

本島に於ける私設鐵道の大部分は製糖業の發達に伴ひ、製糖會社が原料及製品輸送の爲

め敷設したる専用線を後に一般公衆の用に供する營業線としたるものにして、社用品の運搬を主たる目的とし傍ら一般運輸營業を兼營せるものなり。但し臺北鐵道及臺中輕鐵兩會社線は専ら營業を目的として敷設經營せらるゝものなり。

今昭和九年末現在に於ける線路延長を觀るに營業線は五百五十、專用線は千八百五十、計にして前年末に比し前者は二、後者は五十三、計を增加せり。次に昭和九年中に於ける營業狀態は旅客三百十九萬人、貨物三百七十五萬噸、收入二百三十七萬圓にして前年に比較し旅客二十一萬人、貨物二十五萬噸、收入二十四萬圓を各増加せり。

尙本島に於ける私設鐵道を内地其他と比較すれば別記の如し。

(イ) 私設鐵道 (昭和九年)

總數	營業線(料)路延長	旅客(人)	貨物(噸)	收入(圓)
臺北鐵道株式會社	505.3	3,189,285	3,788,554	2,371,555
帝國製糖株式會社	107	533,943	63,392	62,663
新高製糖株式會社	300	387,989	226,401	242,114
臺中輕鐵株式會社	53.1	486,651	405,188	253,014
大日本製糖株式會社	131	381,682	45,969	65,784
	1670	369,033	1,330,554	457,417

(ロ) 内地其他との比較 (昭和九年)

營業線(料)面積千方料に付營業線(料)	旅客(千人)	貨物(千噸)	手小荷物(千疋)	總數	旅客人	貨物噸	手小荷物(千疋)	總數	運輸收入(千圓)
臺灣	505	3,189	3,788	2,371	3,189	3,788	2,371	2,371	2,371
朝鮮	?	?	?	?	?	?	?	?	?
樺太	300	387	405	253	387	405	253	253	253
内地	185	1,274	706	467	1,274	706	467	467	467
鹽水港製糖株式會社	507	253,771	581,398	382,616					
明治製糖株式會社	954	333,344	602,833	448,423					
新興製糖株式會社	185	127,944	706,388	467,173					
臺灣製糖株式會社	668	440,108	438,190	423,372					

本表は拓務統計に依る。

二二 郵便、電信及電話

本島の遞信事業は軍政時代には總督府陸軍局に屬したりしが、明治二十九年四月より總督府民政局通信部の分掌となり、同三十四年十一月通信局の主管となり、大正八年に遞信局と改稱され、同十三年十二月獨立の官制に依り交通局内の遞信部となりて今日に及びり。

本島に於ける郵便、電信、電話の現況を観るに、昭和九年度に於て通常郵便は引受七千八百萬、配達九千三百萬、電信は發信百六十七萬、著信百七十三萬、爲替は振出二千九百五十萬圓、拂渡千七百九十萬圓、貯金は預入二千百萬圓、拂戻一千九百萬圓、現在二千四百四十萬圓、振替貯金は口座受入及拂出各一億一千九百萬圓、現在八十五萬圓なり。又同年度末現在に於ける電話は加入者數一萬五千七百八十四、年度中加入者發信通話度數は九千八百七十萬なり。

今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入の割合は大體に於て樺太最多を示し朝鮮及び臺灣は少し。

(イ) 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便

引受
配入
人口十に對する引受

七八二二、二四〇
九三、〇八六、二二三
一五〇六

電信	爲替	貯金	振替貯金		電信
			現口	口座	
發信	振出	預入	拂入	現口	發信
著信	振入	拂入	拂入	座受	著信
人口十に對する發信	人口十に對する振出	人口十に對する預入	人口十に對する拂入	座受	人口十に對する發信
1,671,638	29,531,525	20,969,810	129,185,890	15,784	1,727,894
1,727,894	27,898,909	18,757,620	129,241,699	98,734,865	3,212
3,212	568	2,367,007	849,295	3,000	
		404	157,000	6,255	

(口) 内地其他との比較 (昭和九年度)

人口十に對する

臺灣	朝鮮	太及	關東州	鐵道附屬地	南洋群島	關東州及鐵道附屬地
150.6	139.3	637.5	1,034.7	170.1	685.5	
3.3	3.4	29.3	24.8	23.9	8.9	
58.8	58.0	59.2	340.3	748.7	139.5	
40.4	55.1	33.6	273.9	337	331.1	
15,784	37,694	5,263	27,269	426	83,041	

通常郵便 電信報 爲替出 貯入金 電話加入者

關東州及鐵道附屬地は關東局統計書、其の他は拓務統計に依る。

二三 職員及俸給

昭和十年末現在に於ける國庫及地方費支辨に係る本島の職員總數は四萬二千三十七人、是に對する俸給年額は三千五百五十萬圓にして其の内譯を觀るに勅任官五十三人三十五萬圓、奏任官八百五十四人二百八十八萬圓、判任官一萬一千四百二十三人千三百十八萬圓、吏員二千九百十四人一百七十二萬圓、囑託千四百九十六人八十九萬圓、雇二萬四千四十一人一千五百九十六萬圓、傭千二百五十六人四十九萬圓なり。

尙昭和九年末現在に於ける國庫支辨に係る職員及俸給年額を朝鮮其の他と比較すれば別記の如し。

(イ) 官職別人員及俸給 (昭和十年末現在)

國庫	人員	俸給年額
總勅奏判囑雇傭	二六八二六	二四、三〇、二九
	五三	三四八、七六五
	八五〇	二、八七四、四四一
	五、四三三	七、四四一、〇五四
	六三二	五、三三、四三四
	一八、八二二	二、九二四、八九五
	一、〇四八	四、一七、六〇〇

地方費
總 奏 判 吏 囑 雇 傭

數 任 員 託

總	10,231,137
奏	9,630
判	5,734,081
吏	1,726,710
囑	3,568,088
雇	3,045,672
傭	69,336

勅任待遇は奏任に、奏任待遇は判任に、判任待遇は雇に夫々算入せり尙傭は事務傭のみにして無手当又は無給の者は之を除外せり。

(口) 朝鮮其の他との比較 (昭和九年末現在)

總數	人員	俸給	臺灣	朝鮮	關東局	樺太廳	南洋廳
奏任	人員	俸給	2,836,790	3,976,733	600,529	372,450	148,093
勅任	人員	俸給	3,896,255	5,645,950	986,677	3,597,755	1,269,197
總數	人員	俸給	6,733,045	9,622,683	1,587,206	7,190,205	2,757,290

判任	人員	俸給	囑託	人員	俸給	雇傭	人員	俸給
人員	5,301	11,339	人員	1,748	1,080	人員	1,539,751	628,848
俸給	7,287,868	14,333,124	人員	2,603,185	1,051	俸給	1,636,907	450,597
人員	591	738	人員	1,70	50,572	人員	2,006	439
俸給	536,748	742,956	人員	4,919	2,006	人員	1,636,907	450,597
人員	18,494	39,199	人員	4,881,539	1,636,907	人員	1,636,907	450,597
俸給	12,424,033	23,596,133	人員	4,288	1,636,907	人員	1,636,907	450,597
人員	987	28,569	人員	1,834,893	1,636,907	人員	1,636,907	450,597
俸給	407,353	1,248,765	人員	1,834,893	1,636,907	人員	1,636,907	450,597

本表は國庫支給の者(本官は加俸を含む)のみを掲げ帝國統計年鑑に依る、俸給は年額にして單位圓なり。

糖

甘蔗收穫面積
製糖

二四、二七五甲
八三三、二〇〇千斤

七六、七九九甲(昭和九年期)
一、六〇九、四〇二千斤(昭和十年期)

一三〇
一三〇

貿易

總額
外國貿易
內地貿易

四三四、八三八
一一一、三三三
三三三、五一四

五二〇、九五〇
六四、五四九
四五六、四〇一

一三〇
一四二

財政

總督府
歲入
歲出

一三一、七八〇、〇〇四圓
九一、九四〇、五九八圓

一四一、六一七、五九五圓
一一、一七六、六八三圓

一三〇
一三〇

專賣

阿片賣渡價額
食鹽賣渡價額
樟腦及樟腦油
賣渡價額
煙草賣渡價額
酒類賣渡價額

四、七二六、五七六圓
二、二七二、八七六圓
八、三二八、二六三圓
一四、〇〇四、五三五圓
一四、〇一五、四九九圓

二、三八四、一四九圓
二、七七二、四五三圓
八、一二三、三五圓(昭和七年度)
一六、五五二、〇七〇圓
一八、五七六、五七九圓

一三〇
一三〇
一三〇
一三〇
一三〇

教育

小學校
兒童

二五、八九五

四〇、〇三三

一三五

鐵道

官設鐵道線路延長
運輸(乘客貨金)
收入(貨物貨金)
私設鐵道線路延長

九四九九
七、五三九、二四七圓
九、八三〇、一八一圓
二、二七三

九九九九
八、〇四一、五九五圓
一三、五七五、五七圓
二、三五三

一〇〇
一〇〇
一〇〇
一〇〇

衛生

醫師及醫院
藥劑師
產婆

一〇三
一、五〇五
九〇
一、〇九四

二二六
一、八〇五
一五三
一、六三一

一三三
一三三
一三三
一三三

公學校
女學校
中學校
實業學校
實業補習學校
師範學校
專門學校
高等學校
大學
兒童
生徒
生徒
生徒
生徒
生徒
生徒
生徒
生徒

二二六、〇一一
四、一九四
三、九六四
一、六八五
九二〇
一、五二一
七七七
四二一

三三三、九六六
五、六六〇
五、四三一
三、一三四
二、一〇六
一、三七〇
九四四
五八一
二二八

一四〇
一四〇
一四〇
一四〇
一四〇
一四〇
一四〇
一四〇

郵便、電信及電話

通常郵便引受通數	五三、〇八九、四五八	七八、三二一、三四〇	二〇
電報發信通數	一、三七七、六一一	一、六七一、六三八	三三
爲替振出金額	二五、七二九、八二二圓	二九、五三一、五五圓	二五
貯金預入金額	一〇、六四三、三二八圓	二〇、九六九、八一〇圓	一九七
電話	一一、二四七	一五、七八四	二四
電話加人者	五三、二八八、九五三	九八、七三四、八六五	二八
振替	七九、〇五九、八三六圓	一一九、一八五、八九〇圓	三三
貯金	三、四三一	五、四一一	三
職員及俸給	七〇六、九三三圓	八四九、二九五圓	三六
高等官	二、六〇九、九七〇圓	三、三六六、〇四二圓	二〇
判任官	一、六六三、〇〇〇	一九、二二六	二六
其他	一五、九九七、九八一圓	二八、八九一、六九二圓	二八
其の他	一〇、二四〇	二〇、〇八〇	九
俸給	一〇、七六九、二〇四圓	一一、七〇九、八五〇圓	九

職員及俸給(待遇職員は本官に含み、無手當及無給者は除外せり)

附録

一 帝國國富總額

昭和五年國勢調査の資料を主として利用し、内閣統計局に於て昭和五年末を選び國富調査を行ひしが其の結果に依れば昭和五年末國富總額は一千百一億八千八百萬圓内、官有一割二分、公有四分に對し私有は實に八割四分を占む。

次に之を種類別に觀るに土地の四百十億九千百萬圓最も多く總額の三割七分を占め、建物二百二十八億四千三百萬圓(二割一分)、家具家財の百二十四億七千三百萬圓(二割一分)等之に亞ぐ。

尙之を世帯及び人口數に就きて觀るに一世帯當り八千六百七十二圓、人口一人當り千七百十圓なり。

更に之を項目別及府縣別に掲ぐれば次の如し。

(イ) 項目別 (單位百萬圓)

總額	一、〇一八	官有	三、四六九	公有	四、六三五	私有	九、二〇八
土地	四、〇三一	官有	三、二二五	公有	一、四二二	私有	三、五五三

廣山徳香愛高福佐長熊大宮鹿沖

(備考)

右府縣別國富推計額は昭和五年末各府縣境域内に現在したる物的財貨に就き其の總價額を表章したるものなり。(對外債權債務差額を除外す)

兒

島口島川媛岡知賀崎本崎分崎島繩

三五六七	二、三三二	八八	八八	一、七〇四	一、二〇〇	五、〇〇〇	一、二〇〇	二、六〇八	一、八八四	一、四八三	二、〇六二	二、三三六	四、一〇一
二、一〇八	一、五二	七〇	七〇	八〇	八〇	四、一	五五	七七七	二、四三	八六	二、〇三	二、四二	四、一
一〇八	九〇	七〇	八七	六三	三	一、四六	五三	八五	五九	八	五	三	二五
二、二七一	一、八八五	七三三	七三七	一、四六四	九八八	四、四三二	一、〇四三	一、七六六	一、六三二	一、三三五	九二四	二、〇二二	四、一

新富石福山長岐靜愛三滋京大兵奈和島岡

歌

瀧山川井梨野阜岡知重賀都阪庫良山取根山

二、九三五	二、二七	一、二二三	一、〇六二	八六八	三、三三三	二、二八七	三、一〇〇	四、六三四	二、二九七	二、三三二	二、七四七	五、五五五	四、七六六	一、〇八二	一、三三七	七〇	一、二六八	二、二二
二、三	五二	七六	五三	五〇	六三〇	一、八五	二、〇九	二、六九	一、六八	六	四七九	四、八九	三、九八	四、四	四七	五八	六三	一、六
九六	八八	七三	五八	三〇	一、七九	一、五七	九	一、八八	八二	六三	三六	二、五〇	一、八九	五	四	三	六	一、三
二、六三四	一、〇三六	一、〇六二	九五一	六八八	二、三三二	一、八四四	二、七九一	四、一七六	二、〇四七	一、〇八九	二、二三二	四、七九六	四、一九八	九八二	一、二三四	六五五	一、〇〇八	一、八三五